沖縄大学土曜教養講座（第 483 回）/NACS-J 生物多様性の道プロジェクト
報告書

フォーラム「地域を知るコツ！」
～生物多様性地域戦略につながる第一歩～

日時：2011 年 10 月 8 日（土）13:00 ～ 17:00
主催：日本自然保護協会（NACS-J）
共催：WWF ジャパン、沖縄大学地域研究所、沖縄・生物多様性市民ネットワーク
後援：沖縄環境ネットワーク、環境省那覇自然環境事務所、沖縄県サンゴ礁保全推進協議会
supported by Give2Asia

発行・2012 年 5 月

公益財団法人 日本自然保護協会

沖縄大学土曜教養講座（第 483 回）/NACS-J 生物多様性の道プロジェクト

報告書・フォーラム「地域を知るコツ！」
～生物多様性地域戦略につながる第一歩～

日時：2011 年 10 月 8 日（土）13:00 ～ 17:00
会場：沖縄大学　2 号館 306 教室
主催：日本自然保護協会（NACS-J）

＜プログラム＞

13:00　開催挨拶・進行　　安部真理子（日本自然保護協会）
13:05　生物多様性地域戦略とは
　　柴田泰邦（環境省那覇自然環境事務所次長）
13:15　第 1 部：話題提供「地域を知るコトで見えてくる」
(1)「沖縄島のサンゴ礁の現状」
　　富永千尋（沖縄県自然保護課課長）
(2)「久米島応援プロジェクトによる久米島での活動事例」
　　権田雅之（WWF ジャパン）
(3)「地元の住民自身がモニタリングをすることの重要性ー」
中野義勝（琉球大学／沖縄県サンゴ礁保全推進協議会会長）
(4)「市民調査で自分たちの地域づくり」
　　開発法子（日本自然保護協会事務局長）
15:00　第 2 部：グループディスカッション
　「地域を知るコツ！を考えよう」
　　ファシリテーター：鹿谷麻夕 (しかたに自然案内)
16:55　閉会の挨拶
　　桜井国俊 (沖縄大学／沖縄環境ネットワーク世話人)
17:00　終了

＜講演者プロフィール＞

◆柴田泰邦（しばた やすくに）　環境省那覇自然環境事務所次長
1993 年、京都大学農学部卒業後、環境庁（当時）に入庁。北海道（大雪山）などの現地や環境省本省に勤務し、特に野生生物課では久米島のキクザトサワヘビ保護区の指定や漫湖鳥獣保護区のラムサール条約登録、仲の神島島鳥獣保護区の現地調査などに従事。国土交通省局への出向のほか、人事院在外研究員として米国国立公園局に派遣。2010 年 9 月より現職（那覇自然環境事務所統括自然保護企画官（次長））。

◆富永千尋（とみなが　ちひろ）沖縄県自然保護課課長
沖縄生まれ、沖縄育ち。琉球大学理学部大学院にて海洋学を専攻する。沖縄の海と関わる仕事を目指し、卒業後、沖縄県に就職、農林水産部漁政課、企画部科学技術振興課研究評価班長、観光商工部新産業振興課技術支援班長、産業政策課副参事を経て、環境生活部自然保護課長に就任する。1993 年には沖縄県人材育成財団の援助で沿岸域管理（CZM）をテーマに米国留学の機会を得るなど、海と人との関わりに興味を持っている。

◆権田雅之（ごんだ まさゆき）WWF ジャパン　自然保護室南西諸島プロジェクト担当
愛知県生まれ。日本大学農獣医学部 (当時) を卒業。在学中 および卒業後、ワオキツネザルやコモドオオトカゲの生態調査プロジェクトに参加。その後、オーストラリアのニューイングランド大学地域科学・自然資源学部修士課程で、国立公園のオーバーユースと地域に与える影響などを調査。同課程修了後は、環境コンサルタント会社勤務を経て、現 職。ＷＷＦジャパンでは、助成金支援事業担当、総務担当などを経て、本年より現職に着任。

◆中野義勝（なかの よしかつ）琉球大学 / 沖縄県サンゴ礁保全推進協議会会長
琉球大学大学院理工学研究科生物学専攻修了（理学修士）。サンゴの生物学とサンゴ礁の生態学、人とサンゴ礁の関わりの基礎についての理解とその展開として環境教育などを通してサンゴ礁保全に取り組んでいる。琉球大学熱帯生物圏研究センター技術専門職員。
沖縄県サンゴ礁保全推進協議会会長、日本サンゴ礁学会サンゴ礁保全委員会委員長。

◆鹿谷麻夕（しかたに　まゆ）しかたに自然案内
東京生まれ。1993 年来沖、琉球大学理学部海洋学科にて海洋生物学を学ぶ。東京大学大学院理学系研究科中退後に沖縄に戻り、2002 年より「しかたに自然案内」主宰。県内の小中学校や市民グループを対象に、海の自然観察や環境教育、環境保全の活動を行なう。珊瑚舎スコーレ講師、沖縄大学・琉球大学非常勤講師。

◆開発法子（かいはつ のりこ）日本自然保護協会事務局長
日本自然保護協会に在職して 24 年。国立公園サブレンジャーや自然観察指導員の養成、環境教育事業、東京湾三番瀬の保全活動等に携わってきた。2010 年から事務局長をつとめ、沖縄・泡瀬干潟の海草藻場モニタリング・保全活動のほか、海岸植物群落、里やま調査など市民参加型地域自然のモニタリング調査手法の開発と実施、「人と自然とのふれあい」研究に取り組んでいる

◆安部真理子（あべ まりこ）日本自然保護協会　保護プロジェクト部
大学、大学院にて生物学と生化学を専攻し、WWF ジャパンに 8 年間勤務。オーストラリアのジェームズクック大学院修士課程に留学し、続いて琉球大学博士課程にてアザミサンゴの多様性に関する研究で博士号（理学）を取得。1997 年に日本国内でのリーフチェック立ち上げに関わった一人であり、以来コーディネーターをつとめている。沖縄リーフチェック研究会会長、日本サンゴ礁学会評議員、沖縄県サンゴ礁保全推進協議会理事。2010 年 4 月より日本自然保護協会にて沖縄の問題や日本の沿岸の問題を担当している。

開催挨拶

安部真理子（日本自然保護協会）

皆さん、こんにちは。日本自然保護協会の安部と申します。台風 9 号の影響で開催が遅れてしまいましたが、たくさんの方々にお集まりいただき、ありがとうございます。

今回のフォーラム開催に至る趣旨ですが、地域の現状を把握することの大切さを、いろいろな立場の方々に再認識していただきたいと思いこの場を設けました。モニタリング、つまり継続して調査をすることはつまらないと思われがちですが、それがとても大切であるということを各方面から説明して頂けるスピーカーをお願いいたしました。

一部ではそれぞれのスピーカーからの事例の紹介を頂きます。そして二部ではスピーカーの先生方も交えて、沖縄という地域を守っていく方向をいっしょに考え作業をしていきたいと考えています。

配付資料の中に「地域を知ること　アンケート」があります。これは第二部で使おうと思っていますので、ご記入お願いします。

それでは最初に、環境省那覇自然環境事務所次長の柴田さんから「生物多様性地域戦略とは」というお話をいただきます。よろしくお願いします。

生物多様性地域戦略とは

柴田泰邦（環境省那覇自然環境事務所次長）

皆さん、こんにちは。ご紹介いただききました環境省の柴田です。私からは地域戦略を策定することの意義や地域戦略をめぐる最近の動きなどについてお話ししたいと思います。

最初に生物多様性の国家戦略と、都道府県の地域戦略があり、国家戦略の話からしていきたいと思います。最初の国家戦略は平成 7 年に策定されました。過去 3 回改訂されており、来年度、COP10 の成果を受けて改訂する予定になっています。

その中で地域戦略の位置づけですが、平成 19 年に第 3 次国家戦略の中で自治体参画の重要性を明記しました。その後、制定された法律にも地方自治体の規定があります。また、COP10 の前の COP9 でも、地方自治体の参画促進を促す議決がされています。平成 21 年に環境省で、地方自治体に積極的に参画していただくために自治体向けの手引きを作っており、地域戦略の意義等に関してはこの中に記してあります。

沖縄県に限らず各地で地域戦略の策定が進められており、全国の自治体で情報交換をするためのネットワーク作りも進んでいます。自治体が地域戦略を作ることの意義ですが、国家戦略はどうしても国土全体を見て全国的な視点からの包括的なものになり、また国の戦略ですので条約上の義務であるとか締約国会議の議決を受けてという形になりがちです。その中では地域の自然がそれぞれに違いがあり、課題があるということはなかなか見えてこないのですが、やはり生物多様性戦略を地域の中で進めていく上では、具体的な場所でどの政策を展開すべきかなど、地域にあった提案をしていく必要があります。そこに地域戦略を策定する意義があるわけです。

その戦略に参加すべき主体の顔が見えてくるところが地域戦略の意義として非常に大きくなってきます。そのような戦略を作ることで、持続可能な地域作りが実際に、具体的に展開されていくというのが地域戦略の趣旨です。

次に国の目から見て地域に期待する戦略です。沖縄で生物多様性が語られる中で、アンパルのカニを素材にした民謡があるのですが、その唄は石垣島のアンパルという湿地に住むカニの誕生日をほかのカニが助け合って恩返しするという趣旨の唄です。15 種類のカニが民謡の中に登場しますが、それぞれのカニの生態を活かして唄っているところに特徴があり、これはまさに生物多様性です。条約や国家戦略など難しいことが言われる以前から、沖縄では生物多様性というものが生活の中に定着していたので、そのような地域の個性を大事にしていただきたいというのが一点です。

それからもう一点は、住民の目線を取り入れることです。国家戦略ではなかなか目が届かないところが地域の人たちの目線です。これは国家戦略そのものの課題ですが、なかなか実効性のある戦略、計画になっていないという指摘を受けます。現場の人が

知らない、あるいは現場に届いていないという課題が国家戦略を進める中で常に出てきますが、それを補うことができるのはやはり地域戦略ではないかと考えております。

生物多様性というと、どうしても自然科学や生物学の狭い領域に偏ってしまいがちです。国家戦略でもいろいろ努力はしましたが、生物多様性という言葉自体なかなか認知度がまだ低いという現状があります。その中で、アンパルの民謡のように、生物多様性というのは実は日常の一般生活と密接に関係していますので、こういう事例を住民の目線でぜひ引き出していただきたいと思っております。

データを元に忠実に作業していくと、国家戦略みたいになってしまいがちですが、その意味でもでも住民の目線、地域の目線を取り入れる工夫をして頂ければと思っております。

県レベルで言いますと、全国で半分くらいの県が既に策定された、あるいは策定中という状況にあります。どのようなところが有力な地域戦略ですか、という質問がよく出て、千葉県の戦略がよく取り上げられます。しかしよその場所の真似をして作るよりも、特に沖縄の場合は生物多様性という観点で言うと、いろいろな独自の要素を持っているので、これを契機に地域の中で自然とのつきあい方を見直してみよう、また逆に国家戦略の方に問題を投げかけるような、そのような意気込みで作っていっていただきたいと思っております。

最初に国家戦略の見直しの話をしましたが、少し宣伝だけさせていただきますと、来年度に向けて国家戦略の見直しを進める中で、今月、来月くらいで地方 8 都市にて国家戦略を見直すための地方座談会を開催しております。那覇に関しては、今月の 25 日に県庁の近くの八汐荘で午後 2 時から開催する予定です。今週からプレス発表やチラシを配ったりしたいと思っておりますので、一般の方の参加も是非よろしくお願いします。

この場が意義あるフォーラムになることを期待いたしまして、私の話を終わらせていただきます。

第1部・話題提供
「地域を知るコトで見えてくる」

安部：それでは次に「沖縄島のサンゴ礁の現状」と題しまして、沖縄県自然保護課課長の富永千尋さんお願いします。

話題提供「沖縄島のサンゴ礁の現状」

富永千尋（沖縄県自然保護課課長）

皆さま、こんにちは。ただいまご紹介にあずかりました沖縄県自然保護課長をしております富永と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

本日は沖縄大学土曜教養講座という非常に歴史の長い講座で、かつ日本自然保護協会のフォーラム「地域を知るコツ」で発表する機会をいただきまして、たいへん感謝しております。今回のフォーラムの要旨を見せていただきまして、私なりにその中で大事な点を 2 点ということで理解しております。

まず一つは、生物多様性を保全して賢く利用するということ、それから、それを子どもたちにつなげるという一連のことです。このような取り組みの第一歩として、地域の人たちが自らの足で自分たちの自然を観察し、その価値、その恵みを理解していくこと、それが非常に大事であるということ。

それからもう一つは、地域が主導してやっていくような調査と、我々のような行政とか大学、それから NGO がやる専門的で広範囲な調査、こういったものが融合していく、そのことによって市民と行政が対話しながら生物多様性に関する戦略を作り上げていく。この 2 点が非常に重要かなと私は感じました。

そこで私からは、いま県がサンゴ礁に関する全県的な調査をやっておりますが、その事業からどういうことがわかったのか、それから、県のほうからどんな情報を皆さまに提供し、これを共有して活用していくことができるのか、そういった点についてお話をさせていただきたいと思います。

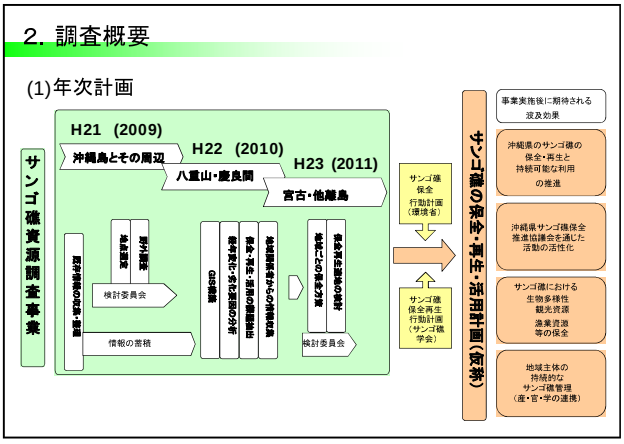
今日、私がお話しするのは 4 つです。最初に、この調査の背景と趣旨についてお話しいたします。次に、どんなふうにして調査しているのかという調査の概要、それから、その調査の結果、沖縄のサンゴ礁はいまどんな状態になっているのか、そして最後に、これからの取り組みについて紹介させていただきます。

沖縄県による全県的なサンゴ礁調査の背景

まず、調査の背景ですが、サンゴ礁に関する全県的な調査は、1990 年頃に環境庁が「第 4 回自然環境保全基礎調査」を行っていますが、それ以降、そういった大規模な調査は行われておりませんでした。10 年くらい前から、白化現象とか赤土の問題、それからオニヒトデの大量発生など、各地でいろいろと報告があります。そういうことで健全なサンゴ礁が非常に減少しているということが危惧されていて、全県的な把握が必要だというような背景がありました。

調査の目的としては、県内の各地域におけるサンゴの生育状況とともに、それらのサンゴに影響を与える攪乱を把握し、地域特性を踏まえた対策、サンゴ礁の適正かつ効果的な保全・再生を推進するということです。

調査はおおむね 3 年かけて行われています。



調査概要

2009 年は沖縄島とその周辺、2010 年には八重山と慶良間諸島、2011 年、今年ですが、宮古島とその他の離島というふうに調査を行っておりまして、それをもとに、将来的にはサンゴ礁の保全・再生・活用計画につなげていくというのが一つの流れです。

どんなふうに調査をしているか

次に調査の方法です。ご存じのようにサンゴ礁の地形は、イノー＝礁池とリーフ＝礁斜面という二つに大きく分けられます。そのうちの礁斜面については、マンタ法という調査方法で行っています。これは、調査員が小型船に引っ張られながら水中を目視し、記録するやり方です。リーフエッジをこのように船で引っ張られながら、ずっと観察していくわけです。

次に礁池内、イノーの中ですが、ここについてはスポットチェック調査という方法で調査しています。これは、調査員がおよそ 50 メートル四方の範囲を 15 分間遊泳し、サンゴの生育状況などを調査する方法です。

沖縄のサンゴ礁はいまどんな状態か

これが調査結果です。これは全県域のものです、地図の下に被度の線が出ていますが、赤いところが 5%以下、黄色が 5 ～ 10%というふうに、色でサンゴの被度を表しています。ご覧になってわかる通り、赤いところが多いというのが沖縄本島周辺の特徴です。礁斜面のほぼ 8 割はサンゴ被度が 10%以下と、全体的に低い状態にあります。ただし、そういう中でも、例えば大浦湾の礁斜面とか今帰仁崎山の礁斜面、それから宜野湾離礁、そういった場所で一部、サンゴ被度が 50%を越える高いところも確認されているということです。

どういう種類のサンゴが多いかということについては、右下の円グラフに出ていますが、水色の部分、これが 29%ですが、ハマサンゴ類です。この割合がいちばん高いという状況です。

次に、これはイノーの中のスポットチェック調査の報告です。少し見にくくて申し訳ありませんが、赤や黄色、ブルーの点が出ていると思いますが、ここでも全体的にサンゴの被度は低い。しかし、部分的に被度の高い群集が広い範囲に存在しているという状況です。ここでも同じように、優占している種

はハマサンゴ類がいちばん高いということがわかっています。

これは久米島での調査結果です。ここは比較的寒色系の色が多い。要するに 25%以上のところが出てきますが、久米島周辺の礁斜面では全体の 4 割がサンゴ被度 25 ～ 50%です。1 割が 50%以上で、沖縄本島と比べると、比較的にサンゴ被度の高いところが多い。ここの優占種は多種混成種か、もしくはミドリイシ類の割合が高いというのが特徴です。スポットチェック調査の結果も、サンゴ被度 25 ～ 50%のところが多いということで、イノーの中も高いサンゴ群集の割合が多いという結果です。

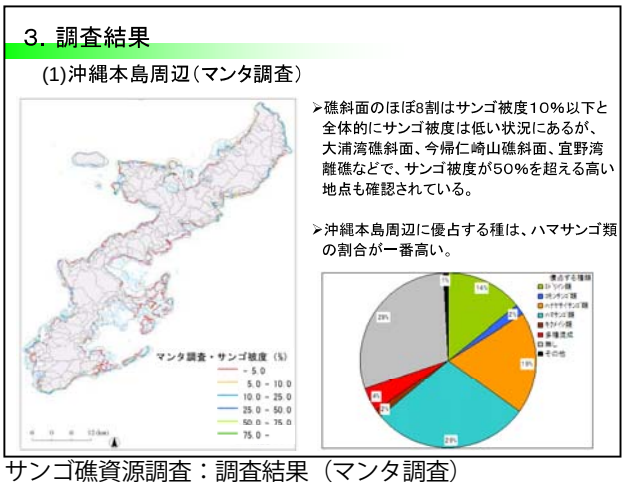
これからの取り組み

最後に、今後の取り組みということで、このような情報を我々としては発信していきたいと考えていますが、一つはまず、沖縄県のサンゴ礁を地図として出したい。印刷物として配布する、それからデータとして自然保護課のページに掲載していく、できれば関係団体ともリンクしていただいて、そこにたどり着けるようにしたいと考えています。

実際にいま、自然保護課のホームページを見ていただくと、沖縄本島については報告書が全部出ています。それをご覧になっていただくと、こんな図が出ています。これは三つか四つの地図を合わせて加工したものですが、報告書で掲載されているサンゴ礁地図には複数の調査結果を重ねて表示しています。これが特徴です。一つは環境省が作成した「サンゴ礁マップ 2008」の図が入っています。この黄色いところやブルーのところです、これは、当時、環境省がまとめた調査における被度です。

その次にもう一つは、赤土等流出危険度予測調査というものがあり、これで流域がわかります。市町村の区分ではなく、流域です。ここの水がどういう方向に流れていくか、その 1 単位の流域を示しています。

それともう一つは、WWFJ さんが作成した「南西諸島の生物多様性評価プロジェクト」の海域区分があります。これも重ね合わせているということで、特徴としては、海と陸というのを一緒に考えていく場合に、ここの海域はこういう単位で構成されているということがわかると思います。



サンゴ礁資源調査：調査結果（マンタ調査）

この情報を発信することによって、これから地域で調査する場合も、そのバックグラウンドになる。そのような使われ方がされていくと、非常にいいと考えています。

これは、同様に慶良間の海域を全部集めて表示しているものですが、例えばこのようなものをグーグルの上に落として見れるようにするということも、いま検討しているところです。

この一つ一つの帯が調査したラインですが、そこをクリックしたときに、そこの今までの情報がテキストで出てくるというのも、いま予定をしていて、どれくらい取り込めるのかわからないのですが、これまで出ていたサンゴ礁の状況や、場合によっては、水質のデータがあるところは水質、そういったものを重ね合わせていけたらいいと考えています。

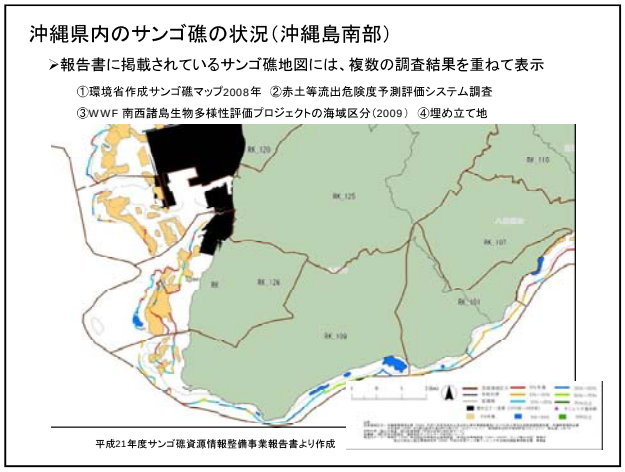
あとは、こういった情報をもとにして、まだこれは仮称ですが、サンゴ礁の保全・再生・活用計画というふうなものにつなげていけたらということで、今年はその素案みたいなものまで作れればいいと考えています。そういうことをすることによって、最終的には、豊かな美ら海の再生ということにつなげていければと思っています。

最後に私の話のまとめです。県は 2009 年度からサンゴ礁調査を行っておりまして、2011 年度までに全県域を調査し、その結果を広く情報発信していきたいと考えています。併せて、この結果を踏まえ、サンゴ礁の保全・再生・活用計画の素案を作成していくということです。いま、県の「21 世紀ビジョン」の中では、特に生物多様性の保全や陸域・水辺環境

の保全が基本施策の項目として掲げられており、特にサンゴ礁が持っている生物多様性は経済的価値に加え、防災や文化の面でも県民に多くの恩恵を与えていると考えます。そういうことで、沖縄らしい豊かな自然環境を劣化させることなく次世代に引き継ぐために、サンゴ礁の保全・再生・活用計画と、生物多様性地域戦略の策定を進めてきたいと考えております。

最後にこの場を借りて少し PR させてください。これは県の農林水産部が取り組んでいるイベントですが、来年秋に糸満市で「豊かな海づくり大会」が行われます。「美ら海沖縄大会」という名称になっていて、このテーマは「守ろうよ、奇跡の星の青い海」というものです。この大会のホームページを、ここに来る前にちょっと見てきたいのですが、そこで最新の情報として、本部町でのグリーンベルトの植栽イベントが上がっていました。要するに、海を保全する場合に陸が大事だということがだんだん皆さんわかってきて、こういうものが「海づくり大会」の中で出されているということに、私は非常に感銘を受け、ようやくこのような時代になった、という感じがしました。特に、このあと権田さんの方からお話しになる久米島のプロジェクトも、実は私も先日、久米島に行ったときに地元の人から聞いて、面白い取り組みをしているなと思い、権田さんのお話を非常に楽しみにしております。

自然保護課としましても、サンゴ礁の保全をする場合に、いろいろなところと連携していかないといけない。これは県庁内でもそうですし、県庁外でもそうです。そういうことで、今後もよろしくお願いしたいと思います。これで私の話を終わらせていただきます。



沖縄県内のサンゴ礁の状況（沖縄島南部）

安部：富永さん、ありがとうございました。行政ならではの大きな取り組みに期待しています。

富永さんにご質問があればお一人、お二人ならお受けしたいと思います。

質問：沖縄市で翻訳・編集をやっております平松と申します。富永さんだけではなく、こういった取り組み全体についてですが、二つあります。一つは言語的な側面です。「生物多様性地域戦略」という言葉そのものがすでに漢語の造語です。この語そのものが、例えば小学生では理解できない。一方、「守ろうよ、奇跡の星の青い海」、これはヤマト言葉ですね。こういう言語的な面で、こういった活動の普及を妨げている側面が必ずあると私は思います。私の考えですけれども、例えば「そもそも生物多様性って何なの？」というようなレベルから小学生にもわかるような出版物を刊行することを検討する予定はないでしょうか。私は理数系がさっぱりわかりませんので、まず、言語的なところでそういうことを思いました。

それからもう一つは、たとえばサンゴ礁が荒らされるということでオニヒトデの存在は無視できないと思いますが、オニヒトデの天敵であるホラガイをハブとマングースのようなことにならないような慎重さを持ってホラガイを放す。そしてオニヒトデが充分に減ったら、ホラガイを引き上げる、というようなこともありなのではないかな、と私は思っています。質問というより、こんな考えもある、ということで挙手させていただいた次第です。素人の考えですが、心の片隅にでも止めていただければと思います。ありがとうございました。

富永：ありがとうございます。特に言葉の問題はまさしくその通りです。私は今年 4 月から課長になりましたが、最初は「生物多様性って何ですか、これは？」というような感じでした。最近ようやくメジャー化してきたと思いますが、やはりこれをつなぐようないい言葉をこれから考えて行かなくてはならないと思っています。これは一例ですが、面白

いなと思ったのは、大阪でしたか、生物多様性戦略を大阪弁で書いているというような話も聞いています。そうすると、沖縄でも方言でいい言葉はないか。例えば「つながり」だったら「ユイマール」みたいなイメージもあるでしょうし、我々も戦略を作りながらいろいろ探していきたいですし、今言われた普及版みたいなものも、子どもたちにどう伝えるかということで取り組んで行きたいと思っています。

オニヒトデとホラガイについてはしばらく考えさせてください。

安部：続きまして WWF ジャパンの権田雅之さんから、久米島応援プロジェクトによる久米島での活動について、ご発表いただきます。よろしくお願いします。

話題提供「久米島応援プロジェクトによる久米島での活動事例」

権田雅之（WWF ジャパン）

皆さん、こんにちは。WWF の権田と申します。今回、お話しさせていただく内容は、資料の中にあるように、南西諸島生物多様性評価プロジェクトと久米島応援プロジェクトについてです。

実は私がこのプロジェクトを担当したのは 3 ヶ月ほど前で、非常に短い時期しか関わっていませんので、アウトライン的な話になってしまうかもしれませんが、できるだけ具体的内容についてお話しさせていただきたいと思います、よろしくお願いします。

まず、この「南西諸島生物多様性評価プロジェクト」について、書いてある通り、2006 年 10 月から取り組みを始めました。WWF は南西諸島に長年関わってきましたが、全体を網羅した生物多様性評価資料がありません。まずそれを作る作業が必要ではないか、という話になりました。その資料を、いろいろな方々、団体、個人、企業も含めてさまざまな場面で使っていただくということで、南西諸島全体の保全に資するような活動になればいいかな、というのが製作企画の始まりです。

このプロジェクトは WWF が旗振り役になりましたが、50 名を超える多くの団体・個人に関わっていただきまして、評価する方法としても、かなり網羅的に、動物分類も網羅しましょうということで、ほ乳類、鳥類、両生爬虫類、昆虫、魚類、甲殻類・・・等々といった専門家の方々にもご参加いただき、全域の実調査を交えながらやりました。ここに書いてある通り、全地域の 3 割を各重要地域として抽出できるようにしましょう、というのを一つの指標として設定しまして、それぞれの分類群ごとのエリアを GIS で重ね合わせ、その生物情報を整理した結果、このように、生物多様性上重要だと考えられる地域を全域で導き出しました。

ほかにも、それぞれの動物分類ごとのデータもありますし、そういったものをまとめた CD も入口のところで無料で配布しておりますので、手に取って見ていただければいいかなと思いますが、こういった形で非常に分厚い内容のものができました。これは研究者から NPO、NGO、場合によっては企業、専門の調査会社の方も協力して書いていただきましたで、かなり大がかりに関わったのではないかと思います。ホームページからダウンロードすることもできますし、紙媒体であれば、フィールドレポートとプロジェクトレポートという 2 冊にわたるものですが、大きな地図付きのものを今日 10 冊くらい持ってきていますので、ご興味のある方はお持ちいただいて、いろいろな場面で使っていただき、参考にしていただければいいかな、と思います。

副産物的な成果としても、絶滅したと考えられていたオキナワトゲネズミの発見があったり、社会学的な面も多少取り入れましたので、千件を超えるアンケート結果から住民の意識調査もまとめることもできましたし、私ではなく前任者がやりましたが、いいものができあがったと思っています。

次に、WWF として実際に生物多様性を守っていく活動に入っていこうということで立ち上げたのが、この久米島応援プロジェクトです。目的としては、地域の活性化を含めた形で、自然環境の保全と持続的な利用をしていく地域モデルを構築しようということが一つです。もう一つは、これは 3 年の短いプロジェクトで私は実は今、石垣島に在駐しているのですが、久米島に通ってのアプローチをとっています。立ち上げ段階に携わった前任者もこの通い型アプローチで、同じスタイルをとりました。常

南西諸島生物多様性評価プロジェクト

駐型ではなくそういう形で地域を支援していくことが、結果として何ができあがるのか、成功なのか、失敗なのか、これはトライアルだと思って我々は活動しているのですが、その結果をとりまとめて、ほかの地域で同様の活動をしていらっしゃる方々に参考になるような資料をまとめる。これも出版にするかウェブサイト上で配布の電子ファイルにするか、検討しているところですが、結果を総括し、とりまとめをして、成果物として発表する予定です。

こちらもやはり、先ほどの 50 名まではいきませんが、いろいろな専門家に関わっていただき、海洋生物学の専門家、赤土に関する専門家、地域協議会の運営や地域作りの専門家、振興に関する取り組みをやってきた人、社会学的な面の専門家、広報・PR に関して、広告代理店に勤務している方ですけれども、そういったメンバーの合同チームとして久米島応援プロジェクトを立ち上げることになりました。

3 年と申し上げましたが、2009 年 10 月にスタートし、今、2011 年 10 月ですので、3 分の 2 が終わったことになります。残り 1 年という中で、そろそろラストスパート、最終ゴールをめざしているところです。活動の資金としては、3 年間。資金は三井物産の方から資金をいただいています。

先ほどの生物多様性マップの結果、非常に重要な島であるということ、クメジマボタルやキクザトサワヘビなど、そういった固有のものもいる、その生態系が、主に赤土によってですが、危機に瀕しているという緊急性から久米島を選定しました。

その活動のコアになる視点は、やはり赤土対策を進めていく、その活動を地元が行う基盤を構築することを支援する。そのためには、そこにある自然そのものも、我々がやろうとしている活動についても、島の方々に理解していただく必要がある、協力し参加していただく必要があるということで、サブ活動としての広報・ＰＲの活動がはずせないのではないか。つまり学校での教育にも取り組む必要がある。そういうことで、コア活動とサブ活動の両輪で動かしています。

これがさっきのプロジェクトの構成メンバーですが、具体的にはこういう方々に入っていただいています。東京の方の組織であれば国環研や自然環境研究センターの方、広告代理店の方、そして東京経済大学の方には社会学的な側面から調査をして頂いています。沖縄の専門家としては沖縄県の衛生環境研究所、琉球大学の研究者の方で NPO 法人を立ち上げられておられ NPO として参加いただいています。他に沖縄県環境科学センターの方など、それぞれの専門性を活かして取り組んでもらうということで、その連合体で動いています。

久米島にもさまざまなステークホルダーがいますので、町役場、地方行政これははずせません。また、それに取り組んでいらっしゃる地域の自然保護団体・NPO、これは今、3 団体の方々と一緒に活動を進めています。それから学校、教育委員会、それらが連携してそれぞれの活動で関与しながら最終的には農地への赤土対策を進めるという取り組みになりますので、農家さんへの働きかけは役場にもやっていただいていますが、その調整員として、例えば久米島製糖㈱の現業員の方に入っていただいたりといったような関係を構築しているところです。

赤土対策を進めましょう、と言った時に必ず必要になる点が、実際にどこをどう対策するべきか、その優先順位をどう付けるかということが問題で、国立環境研究所の専門スタッフに依頼し、沖縄県から提供いただいたデータを元に作付けの作物や農地の地形、面積などを圃場一筆ずつ評価した結果、抽出したものが要対策圃場として 2 段階、3 段階レベルで選定ができました。そこに関して集中的に取り組むということで、10 ～ 18%の赤土削減を地域全体

でしていくことができます。

その結果、海域の調査から導いたところでは、赤土をそこまで減らすことができるのであれば、1 年間で 10 ～ 18%削減できるということなので、それを 10 年間続けていけば、サンゴ礁が生育を回復できるところに持っていけるだろうと、科学的にそういう数値を生み出したということです。

これはとても重要なことだと考えていまして、対策費、とるべき方法、これらを、何をどういった優先順位でやっていけばいいのかということを考えていく上で、こんなふうに科学的に情報を整理して数値として導き出しておくということが大切です。このあと、モニタリングしながら継続して評価していくわけですが、そのときにもこういう数値で出しておくと継続して見ていくことができる、対策シナリオを作っていく上では欠かせない作業だろうと考えます。

これがその地図ですが、今回、久米島の中でも赤土の影響が大きいと考えられた地域として、儀間川流域を集中して取り組んでいます。この地域に関して、圃場を拡大しますとこんな感じですが、色分けしながら、緊急で対策を要する圃場、緊急ではないが要対策圃場、これらを対策することで、全域から見ても相当数減らすことができるという数値を地図として出すことができました。

コアの活動の①としてはこの赤土対策の活動があり、実際その対策をしていく中で、我々が陰になりながら働きかけ、基本的には役場主導で農家さんへの協力依頼を働きかけていく。その活動として民間の地域の団体の方々に参加していただくということで、グリーンベルトや緑肥といったことを進めています。

次のコア活動の②として、地域の NPO へ働きかけるということで、さっき 3 団体あると申しましたが、それぞれの団体は、これまで活動を続けてこられて、それぞれの特色や良さがある。それらを集約した、結果として赤土対策の促進に持っていく。そんな流れができないかということで、例えば島外者向け滞在交流をされている団体には赤土対策のプログラムを組み込んでもらう。学校教育をされている団体に関しては、実際に現場に足を運んだりしながら、子どもたちに身近な問題として、地元の環境にそういった問題が起こっているのだということを伝えてもらう。さらには、地元の企業で構成される社団法人がありまして、民間助成という、たいへん珍しいケースだと思いますが、島内の地元の企業がお金を出し合って地元の保全にお金を付けていく。そのような民間助成制度づくりに取り組む活動を協議しています。

要対策圃場の抽出

サブ活動としては保護活動のほかに、各メンバーが所属している団体での広報機会のほか、地域の活性化を図っていくための久米島の魅力について広報支援。併せて、石垣島白保の WWF サンゴ礁保護研究センター（私が常時いるところですが）による石垣島との交流を行ったり、いろいろな活動も含めて動いています。

昨年 10 月には、久米島町と協定書を締結することができ、資材を提供いただけることとなり、いくつかの圃場ではグリーンベルト植え付け活動を 3 回、中学生たちが参加して行っています。グリーンベルトとして、ベチバというイネ科の植物ですが、こういったものを植えて赤土対策行っています。

こちらは先ほど触れました団体ですが、地元の NPO が旅行者滞在型のプログラムや修学旅行のプログラムを実施しており、そこに赤土問題を入れていくとか、または学校の教育現場で赤土の問題を取り上げていくといったようなことを支援しています。

最後にもう一つ、社団法人で民間助成制度準備を行っている団体があると言いましたが、具体的には 20 件くらいの圃場に対してお金を付けることがで

きるのではないかと見込んでいます。いったん助成制度を実施をしてみる、その支援金として、他の地元連携団体らと同様に委託事業として、久米島応援プロジェクトがお金を付けるというかたちで、いま動かしているところです。併せて、SPSS（底質中懸濁物質含量）法、赤土の評価手法ですが、先ほどの専門家のメンバーが技術供与をするというかたちで、この団体に働きかけ、「久米島海を守る会」という団体なのですが、調査法を習得されて、すでに結果をこういった形でウェブにアップされていらっしゃいます。これを継続していくことで、海の方の状況も継続してモニタリングしていくことができるのではないかと考えています。

これもまた副産物的な発見というか成果ではあるのですが、久米島のナンハナリという海域で日本最大級のサンゴ群落が確認され、地元では以前から知られていたのですが、正式に調査されていなかったということで、研究者が入りました。これはかなり話題になり、相当なものが見つかったと NHK ニュースが取り上げたり、大手新聞にも記事として取り上げられたり。また、海底の鍾乳洞からは新種のヌマエビ発見、といったような成果も上がっています。

難しいところや課題もあり、地域にある組織同士の協力体制づくりには、やはり活動歴の違いがそれぞれありますし、構成メンバーも様々な方がいらっしゃいますし、組織の母体がいろいろなものを抱えているので、協力体制を作るのがなかなか難しい。活動の思想や、それぞれがこれまでされてきたことへの自負、そういったものが要因になっているところもあります。ちょっとした意見の食い違いが遺恨

効果的で現実的な土壌保全策の推進の仕方

を残していて、かなり個人的なものかなという気もしなくもないのですが、すれ違いが生まれてしまったり、方法論の違いとか評価・認識の違いもあります。また、行政は非常に重要なキーパーソンだと考えているのですが、担当者が 3 年くらいで代わってしまう。せっかくの人脈とか経験や知見がリセットされてしまうという現実もありますし、議会の方針だとか国税の地方交付次第によって付けられる予算が毎年変わってしまうとかいったような難しさは、ほかの活動もみんなそうだと思いますが、同様に感じています。

最終的に我々は、この 3 年の活動をとりまとめた成果物として、「外部の者による通い型での地域作りへの働きかけ」の成果を、成功・失敗を含めてできるだけ赤裸々に書けるところまでは書きまとめたいと考えていますので、楽しみにしていてください。

今回のこのフォーラムの趣旨にも関係すると思うのですが、保全活動にはやはり専門家・技術者の存在が必要だということ、それに行政もプラスした形で、地域で活動している方々や団体とのつながりをコーディネートする人も必要なのだろうと感じています。もう一つは、やはりお金です。先ほど言いました社団法人のようにお金を生み動かせる立場、そういったかたちがあればいいのですが、なかなかお金が続かないということになると、継続性が失われてしまう。この三つは地域作りにおいて非常に大事なポイントであると考えています。

私が今いる石垣島の白保でＷＷＦは、常駐型の地域作りをやっていますので、石垣島に来られる機会がありましたら、ぜひお立ち寄りください。どうもありがとうございました。

安部：久米島のご報告ありがとうございました。時間が大幅にオーバーしてしまいましたので、権田さんへのご質問はのちほど休憩時間に個人的にお願いいたします。

それでは次のスピーカー、琉球大学、沖縄県サンゴ礁保全推進協議会会長の中野義勝さん、よろしくお願いします。地元の住民自身がモニタリングをすることの重要性についてお話しいただきたいと思います。

話題提供「地元の住民自身がモニタリングをすることの重要性　把握→比較→展望、数字（データ）から言葉（認識）への脱却」

中野義勝
（琉球大学／沖縄県サンゴ礁保全推進協議会会長）

こんにちは、中野です。15 分間お付き合いください。お話しに興味がありましたら今後ともよろしくお願いします。

８月の台風のさなか浦添まで来て一度は名護に戻り、その後２ヶ月Ｕターンして、やっと今日ここに辿り着きました。その間、いろいろありました。今週のビッグニュースは、スティーブ・ジョブス亡くなりました。彼は今日のテーマにとって、とても重要な人物です。

どういうことかと言いますと、地域の調査というのは、そこに人がいる場所ではさまざまな形で必ず行われてきました。しかし、どこに何があるかというリストもないことが多いので、我々研究者がその地域のデータを見ることはほとんど不可能でした。きちんと出版されたものであれば大学の図書館へ行き全国の図書館、世界の図書館に資料要求ができます。しかし、そういった埋もれた資料を見ることはできませんでした。それが、彼がコンピューターを誰でも使えるというアイデアを出したとたんにネット上で検索できるようになりました。

先ほど、多様性とは何かという話がありましたが、僕なりの解釈は、多様性とは関わりであるということです。多様性を紙に書くと、白い紙の上にいっぱいいろいろな点を打ったり、いろいろな形を書いたりする。でも、それが一個だけで存在するということはまったく意味がない。それが関わることがとても重要です。

生物が 1 種くらい絶滅してもいいじゃないか、と。いいですよ、じゃあ 2 種絶滅させましょう、3 種絶滅させましょう、5 種絶滅させましょう……。それが飛行機の部品だったらどうなるか。10 個目で落ちるかもしれません。それはなぜかというと、1 個 1 個の部品はわずかな関わりしかありませんが、飛行機を飛ばす、あるいは高度を維持するという大きな目的にそれぞれの部品が何らかの関わりを必ず

沖縄県サンゴ礁保全推進協議会の中野さん

持っている。意味を持ってそこに組み込まれているからです。生物の場合も、今日のチラシにもありますが、文化・地域との結びつき、関わりの中にある。多様性＝（イコール）ネットワークだというふうに僕は考えています。

そうすると、もう一つ、地域というものをどう読み解くかということが出てきます。これも簡単なようで難しい言葉です。つい最近の新聞によると、浦添・宜野湾・那覇の消防が統合しようとして失敗しました。なぜか。浦添は、浦添市民の税金を使って消防署を整備してきたのに、なぜよその消防区域の分まで負担しなくてはいけないのか説明がつきません。消防の行政区域と市民の行動域・経済域が一致していないことが問題です。そうすると、この「域」という言葉は「域圏」という言葉に言い換えて考えてみることができると思います。

先ほど久米島プロジェクトの話がありました。あそこは島です。島の出入りは船か飛行機です。それ自体はクローズドとして域圏を考えることができる。僕は名護に住んでいますが、陸続きであっても、名護は経済・行政的に一つの域圏を形成している。これはつまり、どういう域圏であるかということをまず考えないと、そこの保全もできないし、ネットワークもできないということです。ネットワークがかすれたところが域圏のボーダーです。完全に切れているはずはない。ただ、濃密に関わる場所とそうでない場所があるということになる。それを地図の上にいっぱい重ね合わせますと、これもコンピューターが進歩しましたから様々な情報が層状になって

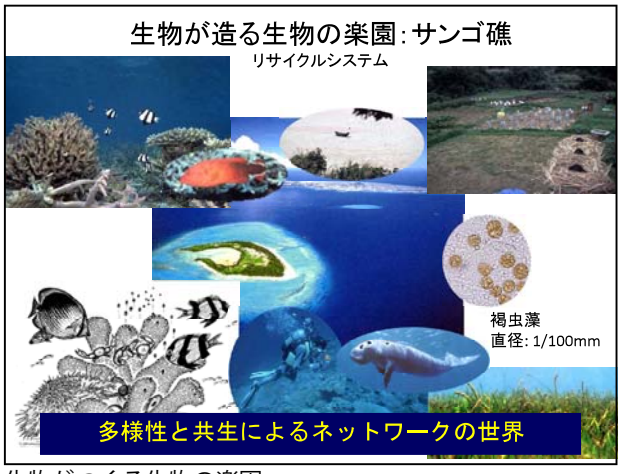
いく。これは GIS という方法で、数字を使わなくても、目で見た地図で、なるほどと、先ほど皆さんは納得されたと思います。

もう 5 分くらい経ってしまいましたが、何を言いたいかといいますと、まず、その場所を知る。知って、ほかの場所と比較する。すると、その関わりの密度がわかります。そうすると、将来、この関わりがどうなるかという展望が何となく見えてきます。それを、我々研究者はデータを作って議論しますが、先ほど、コーディネーターが必要だということが出ましたけれども、これを普通の言葉に代えて、みんなが共通の認識を持つことができるようにする必要があります。この一連のプロセスをやるためには、地域でモニタリングをすることがとても重要です。一連の作業をしてみて、経験があって理解し、考える力が着いてくる。それをネットワーク化することが重要です。

ちなみにモニタリングといいますと、例えば今日、ここに来るまでに何回、信号に引っかかったか。皆さんが何人、車で来て、その車に何人乗っていたか。それを全部モニタリングする。そういうのを考えたらいいです。

僕は毎日 1 回だけ、実験所の桟橋に出て、バケツをボチャンと入れて、温度計をバケツにボチャンと入れて水温を測る。それが 20 年分溜まりました。毎日たった 1 回ですよ。それをずっと見ていくと、その年その年にあった生態学的な大きなイベントが温度と関わるのだということがよくわかる。

皆さんよくご存じのマウナロアという火山の観測



生物がつくる生物の楽園

点で 90 年間、二酸化炭素の濃度を測りました。90 年ですから、1 人の人間では絶対できません。「あなたお願いね」「お願いね」とバトンタッチして 90 年。最初に発案した人がコンセプト、意味を説明したから、みんなやったのです。やっているうちによくわかる。90 年経ったら、誰が見てもわかる右肩上がりのグラフになりました。これはとても有名な実証例です。

先ほど多様性の話をしましたが、多様性の多い生態系、これは生物の話になりますが、2 つの代表的なものをあげますと、一つはサンゴ礁、もう一つは熱帯降雨林です。沖縄の照葉樹林もこれに含めていいと思いますが、共通点は何かというと、とても温度が高くて安定しているということです。温度が高いだけではダメです。安定しているということがむしろ、生物の進化の実験の場合には重要です。そこでさまざまな種分化が起こったことが生物多様性の増加だということができます。

先ほど言いましたネットワークというのはどういうことかと言いますと、サンゴの中に褐虫藻というものがいます。さまざまな生き物の生態学的な骨格をサンゴが作っています。そこに住んだり、食べたり食べられたり、いろいろな関係ができます。先ほど新種が見つかったと言いましたが、新種は新種で必ず何かと関わっています。その関わりを線で見る習慣をつけたらいいです。洞窟の中に生きているエビは、その洞窟がなくなったらいなくなるわけです。そのエビを食っている何かがいるかもしれません。あるいはそのエビ特有の病原菌があるかもしれません。いろいろなふうにネットワークを想像してみます。

沖縄は島そのものがサンゴでできているわけですが、人間もそれに関わっていることはすぐわかります。要するにネットワークの世界だということです。簡単なポンチ絵にするとこうなりますが、これは 70 年代に描かれています。例えば時間的に関わりの様子の違いを見てみますと、これは渡名喜の例ですが、最初はサンゴ礁ができていない。そうすると、ここは台風の時に水が流れますから遺跡がないですが、今から 3500 年前にサンゴ礁が完成すると、人の定住の跡が観測されます。現在どうなっているか

というと、水路が切られて港が整備されて、外から大量の物資が持ち込まれ、それがサンゴ礁のイノーの中へ出されるというような構造になっています。その時々によってネットワークの様子がかわるわけです。当然その中でさまざまな言葉が生まれます。

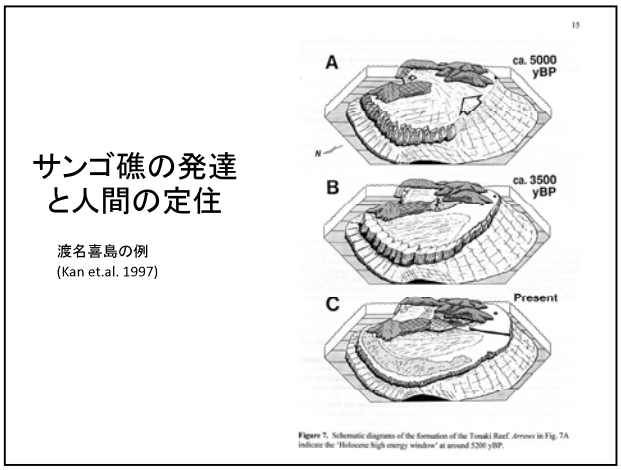
これは備瀬です。備瀬という場所も、2000 年前の遺跡がこの集落の下から出てきました。2000 年間、人々はサンゴ礁と、このサンゴ礁が作った陸地と関わりながら暮らしてきたことがわかります。サンゴ礁の地盤の中には必ず地下水が浸透していますので、こういう場所では人が 2000 年間暮らすことができます。そうすると当然、文化が生まれます。それを絵で表現してもいいですし、図で表現してもいいです。要するにこれは人間が作ったネットワークの中でコミュニケーションの手段です。

その手段としての言葉ですが、これは与論で調べたものですが、イノーの中に方言名でこれだけの地形を示す生活言葉が入っています。このラインが年取った漁師さんのものです。同じ言葉を漁業に就いているけれども若い人に聞くとこれだけに減ってしまいます。なぜ、これだけ言葉が消失したかというと、関わりが薄れたからです。イノー、クチという言葉で若者はすんでしまうわけですが、タコを捕ったりしていると、それぞれ地形を言い分けないといけない。

最上段のラインは地形をさす地理学の用語です。実際に写真で見ると、こういうふうになります。これを平面図で見るとこうなります。どういうふうにその世界を認識するかは、その関わり方によって違うということです。

これは北谷町のサンゴ礁です。現在はこの辺の埋め立て地にいっぱいダイビングショップがあり、埋め立て地前面のサンゴ礁にたくさんのダイバーが入っています。これは 1945 年の米軍の写真ですが、先ほどの埋め立て地にこんな広大なイノーがありました。このことを今のダイビングショップの従業員は知りません。埋め立て前からある元の集落の人たちは先ほどのようにここを細かく言い分けていたわけですが、利用している、関わりがある限り、そこに対する認識があるということです。

先ほど県のサンゴ礁資源情報整備事業のことが出



サンゴ礁の発達と人間の定住（渡名喜島の例）

ましたが、新たな認識のために沖縄の島々を科学的に調査しています。その一部を見ますと、ここに海岸線があって、ここにサンゴ礁がありますよ、と地理的な区分毎の境界になっている。そして、この線がマンタ法で調査した部分を示している、先ほどの絵に戻りますと、これは調査区分をマンタ法の調査結果を基にベタで塗ってありますので、わかった気になります。確かに全体を見るときにはこれは大事です。沖縄県全体でどうするかという議論の時には大事ですが、自分の家の前を考えてみてください。

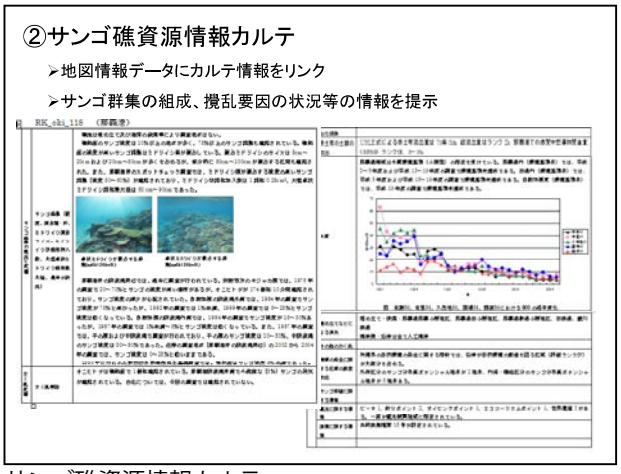
那覇市を出してありますが、実際に調査したのはこの色の付いた線のところ。あとは白地図です。地域で何か考えるときには、これを白地図として使ってほしいと言われていましたが、その通りで、地域で空白部分を埋めないとあまりにも情報が希薄でこれは使えません。

例えば先ほど見せました北谷の埋め立て地の前でコツコツと 1 個のサンゴを、もう 6 年になりますが見ているグループがあります。ダイビングショップですが、50 センチの物差しで枠を作り写真を撮り続ける、見ているときはよくわかりません。それを面積や直径として計って数値にします。とてもじゃないけど普通の人には読み解けません、これは理数科の仕事です。これをグラフにします。たった 1 個のサンゴの数値をそのままグラフにしました。そうすると、途中で死ぬもの、どんどん成長するもの、いろいろなことがあります。いろいろなことがあるということが、多様性としてもう一つ大切なことです。つまり、ここで大事件が起これば、例えば大規

模な白化みたいなことが起これば、全部ゼロに収束してしまう。あるいは意識的に人間がコントロールすれば、もう少しこれを上げることができます。この振れ幅があるというのが自然な状態です。我々は数学で平均を取ったり、偏差を取ったりして、そのふらつきの様子を利用します。ですからこれを線で結んでくださっただけでも、上がったり下がったりしているということを人に伝える手段になります。

仮に GIS ができなくても、今 GPS を 1 万円くらいで購入し手に持って歩けるわけですから、あれを持って、みんなで大潮の時にイノーの中を歩き、地点ごとの様子をサンゴのある・なしなどの決まりに従って記録し、あとで星取り表を作ると、これだけでも面的なイノーの中の調査ができます。あるいは、水の中は見えないから地図がほしい。ダイビングの雑誌なんかにはポンチ絵を描いてありますが、もう少し正確な地図がほしい。すると、先ほど言ったようにラインを引いて升目を取り、ラインを当てて作ります。その上に何があるかを入れていきますと、これもコンピューターの普及のおかげでこういう立体図ができます。写真では狭い範囲の断片しか伝わりません。ここで、こういうふうな広がりがあります、ということを見て初めて、みんなが共通の空間認識にしたがって議論のスタートができます。

もう一つ。これは名護市が今から 20 年ほど前に作った都市計画図です。僕はこれを見せていただいたときに、かなりよくできた都市計画図だと思いました。当時、担当していた方々が先見の明があったのだろうなと思います。ただし、担当した人たちが



サンゴ礁資源情報カルテ

名護市の将来にどういう認識を持っていたかということを示すように、この図には海が漁港しか入っていません。海に面したきれいな三日月型の名護湾の海岸線を思い浮かべてみるとわかりますが、あれは開発をちょっと工夫すれば、今頃、東洋のマイアミと呼ばれるようになっていたと思います。名護市が観光に力を入れていれば、恩納村はあんなに潤ってはいなかったと思います。ただ残念ながら、当時の皆さんの認識では、土地をきちんと使う、海は防災のために埋め立てる、というのが常識でしたので、そのように作られました。

最近になって名護湾の海岸部に、海に向かってもう一度再開発しようということで、さかんに人工ビーチを造っています。ここにも一つできた。そのときになって初めて皆さん、海の中を見たのです。人工ビーチもいいですが、この生のままの海をそのまま使いたいと考える人たちが出てきました。そういったことをもう少し早く議論できたら、青写真が作れたのです。その地域のコミュニケーションが、ある一時期の規制の知見だけで済ますのではなく、さらに海の中を細かく知っていれば、いろんな意見が吸収できただろうということが言えます。ここではサンゴを移植して、その様子をきちんと見ています。科学的なアプローチもされています。そういうものと議論のオプションもたくさんあったわけです。

これはそのすぐ横にある自然海岸ですが、こういうものが隣同士にあり、どちらをどう使うのか全体像（グランドデザイン・都市計画）についての議論がないままに、場当たり的なミニ開発になっていないか心配です。

今言ったことで、人間はどういう意思決定を行うのか。関わりを持ちたいという人をステークホルダーと言いますが、観光で利用したいのか、漁業なのか、研究で利用したいのか、教育なのか、あるいは文化、あるいは宗教的・哲学的な利用をするのか、あるいは国土保全のために防災なのか。必要なグランドデザインを一気に完成するような巨額なコストのことを考えますと、バラバラにものをやるとコストはあまりかからないけれども、そういうものを統合できるネットワークを作れば、集約して大きなも

のが作れます。そういう意思決定の仕方を今後していったらどうですかということです。

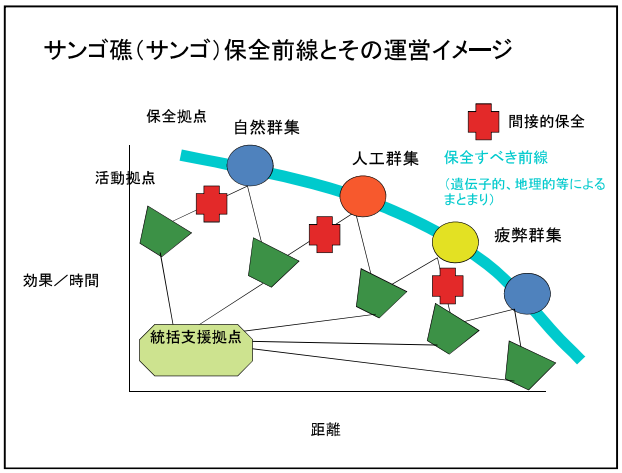
ちなみに、活動拠点というのは必ず小さいのです。この模式図の緑のところは活動拠点です。一人で頑張っている方もいます。あるいは省庁のように膨大な予算を持っているところもありますが、たいがいは小さい。それらがどういうアプローチをどのようにしたいのかというのを、後ろで、こんなにしたらいいのではないか、というシンクタンク的なものがあればいちばんよかろうと思います。

そういういろんな認識、歴史的な認識や現状の認識をし、将来の課題について話し合いをすると、よりよい将来像としてのグランドデザインが出てくるということです。例えば教育にしても、地域のことを知っている人を頼めば、いろいろな教育ができます。これがやがて、この地域の親を教育することになります。親も巻き込まれるという意味で教育はすごく即効性があります。子どもたちは、自分たちが引き継いでいくというアイデンティティを持ちます。

そうなって、最後に今はやりのサンゴの移植ということを考えるとき、林業との比較が可能でしょう。林業いうのは地域産業です。その土地に合ったものを植え、その土地の暦に合わせて手入れをし、最大効率を追求してそれで作るのが杉林のような単一林なのです。これが、今、我々が持っている林業と言う栽培技術です。例外があります。多種混植という多様性原理を利用した造林方法です。それをやると実は多様性の高い混合林ができます。サンゴの移植では、それぞれの種についても栽培技術的にまだ未熟ですし、多様性の高いサンゴ群集を作り出すのはまだまだ遠い先のことでしょう。

先ほどサンゴ礁の保全の話をしました。今後どう関わりたいかという話をしました。今後どう修復したいかという話をするときには、この手間を考えてどこまで行くのかということを、さまざまな試行やそれぞれの意義について考えて、段階を追って目標を設定して持っていないといけません。

最後に地図の話が出ました。グーグルから 3 つの海域を引っ張ってきて、同縮尺で考えました。先ほど環境省那覇自然環境事務所の柴田さんから石西礁湖の紹介がありましたが、石西礁湖はこれくらいの規模を持った海域、これと同じ規模を持ったサンゴ礁性の浅海域は慶良間にあります。それからもう一つ、これです。この海域を一つの海域として捉える考え方は今現在ないはずです。そういう認識は行政的にはまだ持たれていません。しかし、ここにもそういう巨大な浅海域が存在するということを、皆さんここに住んでいるわけですから、どう関わりたいかということを、今後考えていったらいいのではないかと思います。以上です。



サンゴ礁（サンゴ）保全前線とその運営イメージ

安部：ありがとうございました。お一方だけ、質問があればよろしくお願いします。特にないようでしたら、休憩時間もありますので、個別に中野さんに質問していただければと思います。

それでは最後のスピーカーになりますが、日本自然保護協会事務局長の開発法子から、「市民調査で自分たちの地域作り」についてご紹介させていただきます。

話題提供
「市民調査で自分たちの地域づくり」

開発法子（日本自然保護協会事務局長）

皆さん、こんにちは。日本自然保護協会の開発です。最初に、主催者の一員として、こんなにおおぜい来てくださったことに感謝申し上げます。それから、今日の日のために、共催団体として沖縄大学地

域研究所でこの会場を準備していただき、チラシも作っていただきました。沖縄・生物多様性市民ネットワークさんには、この会議のことを多くの人に伝えていただき、WWF ジャパンにもご協力いただきました。後援団体の皆さんも含め、この場を借りて御礼申し上げます。本当に今日はありがとうございます。

それでは最後に私の方から「市民調査で自分たちの地域作り」ということで話題提供をさせていただきます。

日本自然保護協会はこれまで、自然保護のためにいろいろなところでいろいろな調査をやってきました。その中から今日は、時間の関係で里やまと「人と自然とのふれあい」についての調査をご紹介します。皆さんの保全活動のヒントになれば幸いです。

市民による里やまの保全活動を調査

最初に、市民による里やまでの保全活動調査についてお話します。これはまだ、環境省が環境庁だった頃です。1990 年代から 2000 年にかけて、全国で里やまの保全活動が盛り上がりました。それで環境省も、里やま保全に取り組もうということになりましたが、最初環境省は、いかに里やまにレッドデータブックに載っているような貴重な生き物がいるかを調べ、里やまのどこが重要かということを示そうとしました。そのときに私たちは、里やま保全活動は市民が大事だと思い進めてきた活動で、貴重な生き物がいなくても、そこに住んでいる人たちが大事だと思えば、そこの里やまは大事である、という考えのもと、全国の市民による里やまの保全活動の実態を調査しました。

そしてマップにあるように、2000 年の時点で 1000 件以上の活動をしているところがわかりました。当時はまだ、どこが里やまかという、里山の分布さえわかっていいませんでしたが、それがわかりました。

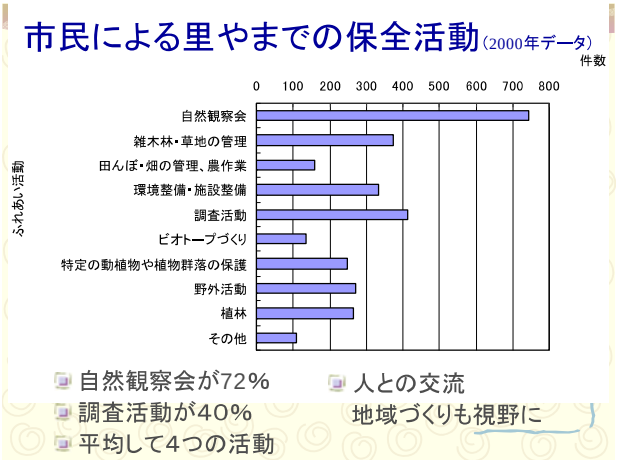
保全活動の内容についても調べました。実ににさまざまな活動をしていました。いちばん多かったのは自然観察会、その次に、驚きましたが調査をしているというのが多かったです。40％の団体が調査をしていました。そのほかにビオトープ作りや雑木林の手入れ、田圃の整備など平均して 4 つの活動をやっていました。里やまの保全は市民の活動があってこそで、市民の自然観察会や調査活動が大きく貢献しているということを、この調査でアピールしました。

地域の人が参加する環境省のモニ 1000 里やま

現在、環境省が、全国で「モニタリングサイト 1000」という事業を実施しています。これは、里やまだけでなく、森林や干潟、シギ・チドリなどの渡り鳥や砂浜とウミガメの生息状況などを調べています。日本自然保護協会では、先ほどの活動の延長として、里やまのモニタリング調査を引き受けることにしました。当初、環境省はこのモニタリング調査では、専門家による調査を計画していました。が、日本自然保護協会ではこの「モニタリング 1000」を 100 年続けると言うのであれば、地域の人の参加なしで、専門家だけで継続してやり続けることは難しいのではないかと考え、特に地域の身近な自然である里やまの調査は、市民参加の調査としてやるべきだと提案し、市民調査の手法を確立し、実施することにしました。

このポイントがあるところの全国の 200 カ所弱の里やまでモニタリングをしています。残念ながら沖縄本島にはありませんが、久米島、それから西表でサイトを設けて行っています。

市民がやるといっても一定の科学性が担保されないと、いくら調査しても、専門家でない市民がやったのだからあてにならないと言われてはしかたないので、調査の方法を考えるときは専門家に協力していただき項目を決めました。例えばカエルを調べる



市民による里山での保全活動の調査結果

というときも、生きたカエルでは動き回ってわかりにくいので、卵で調べます。これだとじっくり観察できますから正確に調べられます。哺乳類はなかなか見つかりませんので、自動撮影装置を利用します。

その結果、自動撮影装置で、外来種のアライグマが生息していることが各地で初めて発見されました。チョウの調査では、本来は南方にしか棲んでいない種が北の地域でも確認されるなど、市民のネットワークで調査を実施したおかげで、全国的な温暖化の影響を捉えることができました。

このような科学的な成果をあげることは第一の目的ですが、一方で市民による調査をいかに地域のものにすることができるかが、もうひとつの大きな課題です。生物多様性を保全し、持続可能な地域づくりをするためにやっている調査ですので、調査することが目的になってしまってはいけないと考えています。調査対象を調査するだけでなく、地域に入ったら五感でその地域のいろいろなことを捉えることができます。

地域の人への調査結果の還元

鹿児島県の漆という地区の例ですが、ここは田の神様がたくさんいて、地域で田の神様のコンクールを行っているそうです。調査の時にそんな地域の暮らしや文化のあれこれを知って歩いていれば、どこに何ができた、何がなくなったなど、いろいろな変化を知ることができますから、生き物や自然環境の変化が現れたときに、その要因を推測する、貴重な情報が自然と集められる、ということがあります。

この地域の調査で担当者にとって、今チャレンジのしどころになっているのが、地域の人への調査の結果の還元です。調査結果を知らせるために、高い頻度で調査説明会を地域の人たちに行っています。このときは、350 人しかいない地区で 37 人が参加してくださったとのことです。

これもやり方があり、チラシだけで呼びかけても、なかなか来てくださらないので、調査報告会をその地区の自治会の会合後に設定させてもらい、皆さんが帰らないうちにやってしまうとか。しかし、本当はそのときに地区の人から、生き物情報のヒアリングをしたかったそうなのですが、地区の人たちは、自分たちの会合が終わったので早く帰りたく、そわそわしてそれどころではなかった雰囲気で、その日は説明だけで終わってしまったそうです。

そのあと再チャレンジで調査結果をポスターにし、地区の運動会のときに掲示板に貼らせてもらい、みんなの目に触れるようにするなど、試行錯誤で、うまくいくとは限りませんが、そういう努力をしているところです。

自然とのかかわりに気づいてもらう調査

次に、「人と自然のふれあい調査」を宮崎県の「綾の照葉樹林プロジェクト」を例にお話ししたいと思います。

これは国（林野庁九州森林管理局）、宮崎県、綾町と NPO てるはの森の会、日本自然保護協会の 5 者で協定を結びプロジェクトを実施しています。スギやヒノキを造林してしまったところを照葉樹の自然の森に復元しようというプロジェクトです。スギやヒノキを間伐して、周りから照葉樹の種が飛んでくるのを待ち、自然に復元を図ろうというものです。

ところが、この 5 者は一生懸命やっているのですが、地域の人、町民はほとんど関心がない。照葉樹林はあって当たり前。プロジェクトは上の方でやっていて、遠い存在で自分たちには関係ないという状況でした。これでは、いくらプロジェクトである期間予算があってやったとしても続いていきません。やはり地域の人にいかに入ってもらうかということを考え、「人と自然のふれあい調査」で地域の人と照葉樹林の繋がりを、また直に照葉樹林ではなくても、照葉樹林から連なる町の周りの自然との関わりに気付いてもらうということをしました。

簡単にふれあい調査について紹介します。はじめに五感によるアンケートを行います。「目に浮かぶ風景、耳に残る音……」と聞き、それを集計しました。すると、その地域の人にとって身近な自然でダントツに関わりがあったのは川でした。照葉樹はなんと 2 票で、本当に下の方でした。このような状況でいくら照葉樹は大事だと言っても、なかなか自分のものとは思ってもらえません。

ということで、頭ごなしに照葉樹だと言うよりも、まずは地元の人が大事だと思っている川や魚捕り、れんげ畑……、これらから照葉樹に繋げていく方が本来のことだろうということで、活動することにし

ました。

調査の際に、ただアンケートを書いてんもらったり調査者が聞き取りするということではなく、なるべく多くの人に参加してもらい、40 ～ 50 代なら飲み会の席で、おじいちゃん・おばあちゃんは昼間にお茶とお菓子で、というようなかたちで懇談会をしながら、どのような関わりがあったのかとか、自然とどうつきあってきたのかをやりとりしながら聞き出す、というような方法でやりました。

共通の思い出があると、あれはそうだったとか、違うとか言い合う中で、例えばこの人だと田圃の溝でカノヤマ（ツグミのことですが）を捕ったときの歌があるということで披露してくださり、そのようなこともだんだん掘り出せてきました。

そのようなことがわかったら、地域のどこに皆さんが大事だと思っているものがあるのかということを明らかにします。一緒に歩いて自分たちの目で見て、もう一度、どこに何があったということを確認していきました。ここがユンノフチという、みんなが子どもの頃飛び込んで遊んだ淵だとか、水死体が上がった場所など、いろいろなことが出てきます。そのようなことは地元の人たちも、このような調査をしないとすっかり忘れていた、記憶の奥底に眠らせていたことだったりします。この過程は、もう一度自分の地域を発見する作業でした。

お話からできてきた「生態系サービスの地図」

このような作業を何回か繰り返し行い、作ったのがその地区の「ふれあいマップ」です。どこに何があるとか、生き物はここにこんなものがいたなど、結果としてこれはまさに地域の生き物と自然とのつながり、私たちが使う言葉で言えば生態系サービスの地図になったといえます。

これができて、地域がどう変わったかというと、これを作ったからと言って、地域の人が生物多様性は大事だとか生態系サービスを守っていかないといけない、などということはありませんでした。自然保護という言葉が聞かれることさえありません。しかしそれでいいと思っています。というか当然ですよね。実質、生物多様性が守られることに繋がっていけばいいと思っています。

そして、できあがったこの地図を地区の各家庭や役場に配布してもらいました。この地図で地元の人が何に気付いたかというと、この地域で子どもたちに何を伝えなくてはいけないかということが思い起こされた、というのが一つと、もう一つは、自分たちが年を取ってもここで元気に暮らしたい、今の年寄りも地域を歩いているとみんなが声をかけて、元気に暮らしてもらう、そういう地域にしたいという、地域の未来像が出てきました。

人と自然のふれあい調査によってできた
「ふれあいマップ」（宮崎県綾町）

これは、直接的に生物多様性保全ではありませんが、それだけ地域に愛着が生まれれば、例えばそう簡単にここにホテルやビルを建てたり、外からのデベロッパーが入ってきての開発はないだろうと、そういう思いでいます。

最後に、この地図を作ったときに地元の人が調査の結果、書いた言葉を紹介します。

「先人たちが守り残してくれた照葉樹の森から今もなお脈々と湧き出る湧水のように親から子、子から孫へと代々語り継がれてきた小さな文化が地図になりました。一つの家族のような私たちの上畑地区を歩いてみませんか。そして出会ったらぜひ声をかけてください。」

ということで、ここで初めて「照葉樹林」という言葉を入れてもらえました。それと私たちへのリップサービスかと思いますが、最近では、ここは切り干し大根を作っている地区なんですが、「照葉樹の森から自然のいい風が吹くから、うまい切り干し大根ができるんだ」と言ってくださったりして、それでいいのかなと思っているところです。

これは、今年 6 月に名護市の大浦にお邪魔したとき

に、民宿で見つけたものですが、このような調査はわざわざ私たちがやらなくても、実は地域に蓄積されてある。

これは名護の二見以北十区で一個人が作ったものですが、すべての地区のいいところ、文化や自然を、手作りの冊子にしてあります。まさにこれはふれあい調査と一緒だなと思いました。「十区の生き物たち」としてきちんと生き物の写真が載っていたり、見どころ散歩マップがありました。作った人も別に生物多様性とか自然保護だとか意識していませんが、地域のことを大事に思っている。そのようなところを見つけるところから始めたらいいのではないかと思います。

これは少し見づらいかもしれませんが、「奥間川生活地図」といって「奥間川に親しむ会」の発行です。昔、やんばるのどこで何が行われていたか書かれています。このような感覚は地域の人が持っていますので、それに寄り添ってやっていくといいのではないかと思います。

ふれあい調査の延長として、去年 COP10 のときに、今日のタイトルにもありますが日本自然保護協会の「生物多様性の道プロジェクト」で、生態系サービスモニタリングの調査を行いました。生態系サービスを「自然からの恵み」と言い換え、身近な生き物、食べ物、薬、水、材料、道具、産業、仕事、遊び、子どもの遊び場、技術、行事、神様、神事という項目で地域ではどんなものがありますか、というアンケート調査をしました。

いくつかピックアップしてご紹介しますと、おかずやおやつになる生き物は、植物でいうと、昔はクワが圧倒的に 1 位。本土の回答が多いですが、2 位がアケビでした、今では 1 位がワラビやタラ、セリといったような山菜に変わっていました。昔はごく身の周りから果物として食べていたものが、今は山菜ブームに見られるように、特別なものとして食べているのかなとか、食べ物で魚や貝やエビ・カニになると、昔はこんなに食べていたのに、今は激減して食べていないということがわかりました。それだけ水辺環境が悪化したり水質が汚染されて食べる気にならないなど、身の周りの自然の変化が起きてきていることがわかります。しかし相変わらずウナギがトップでしたので、ウナギは日本人にはとても大事な食べ物なのかなと思いました。

それから、子どもの遊び場の変遷を調べたときに、これもいろいろ変わっているのがわかりました。昔は川や原っぱでしたが、今は公園が 1 位で、調査の時に付いてきた言葉が、川は危険、海は怖い、子どもだけで遊ぶのは危険と、「危険」の文字がすごく目立ちました。ここからも、暮らしや環境が変わってきたということが捉えられるのではないかと思っています。

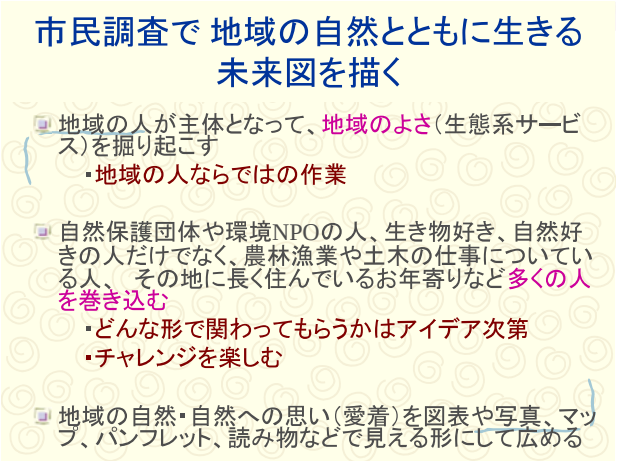
地域の自然とともに生きる未来像を描きたい

ここまで大まかに紹介してきましたが、市民調査で目的としているのは、地域の自然とともに生きる未来図を描きたいということです。地域の人が主体となり地域の良さを発見できるような、地域の人ならではの、サンゴや鳥、植物でもいいのです、人と自然のふれあいでもいいですが、そのような作業ができたらと思います。

それから、どうしても私たちの活動では、関心の高い自然保護団体や環境 NPO、生き物好き、自然好きの人が集まってきます。農林漁業をやっている人や土木の仕事に就いている人、その地に長く住んでいるお年寄りなど、多くの人を巻き込むことを考えたいです。どんな形で関わっていただくかはアイデア次第。今日の前の講演者のお話にもいくつかヒントがあったと思います。先ほど言いましたがうまくいかないときにも、チャレンジを楽しみながら巻き込むことをやってみる。そして、地域の自然や思いなどをパンフレット、写真、読み物など見える形にして伝えることをするといいと思います。

例として、まだできていませんが、これは泡瀬干潟で保護活動をしている仲間で作ったもので、地元の人や農林業者は入っていませんが、泡瀬の自然をいかしたエコタウンを作ったらこんな町ができるのではないかというイメージをイラスト地図で表したものです。それから、こちらは川崎市が地域の身近な自然保全について、とてもわかりやすいイラストや写真で市民向けに作っている冊子です。庭でこんなことしてみようとか、具体的に書かれています。こんな例のような形でもいいと思います。

最後に、今日のフォーラムの主旨でもありますが、



市民調査で地域の自然とともに生きる未来像を描く

生物多様性地域戦略のことを少し考えようと思います。昨年の COP10 を機会に、地域連携生物多様性保全活動促進法ができ、この 10 月に施行されました。これは、生物多様性を守るためには地域でいろいろな人が連携して活動していくことをたくさんやらないとならないということを政府が認識したからに他なりません。この法律は、まさに市民活動があったからこそ生まれた法律だと思います。

この法律の基本方針を作るときに私も委員会に参加させてもらいましたが、私も含めこの会議に参加していた人たちに共通していた思いは、生物多様性を守るとか保全活動を促進するのは何のためかというと、地域を元気にするためなのだ、という認識でした。

ですから、これから地域戦略づくりや保全活動を進めるときに、携わる人も地域も元気になるような活動をしたいと思います。泡瀬などを考えると、楽しくはないです。いくら言っても行政は文章や態度を変えませんし、私たちの意見は反映されません。言うべきことは言っておきますが、それだけでは疲弊してしまいつまらないので、自分も楽しみながらできることをしてみようと、住民が楽しく参加できる作業を作る。

例えば観察会を、地元の農業をやっているおじさんや漁業やっているおじさんに地元を案内してもらう形にすると、私たちが行っている自然観察とは別の視点で自然が発見できるかもしれません。先ほどいいましたような、お茶を飲んだりや料理を食べながらの気楽な懇談会もいいではありませんか。会議方式で決まったテーマで議論すると、言葉遊びになりがちな気もします。立派な文言よりも実質を取っていきたいという思いがあります。

「生物多様性」は結果として付いてくればいいもので、立場が違うと言葉が通じません。開発する人と自然保護する人と行政と地域で暮らしている人は、同じ「保全」と言っても、みんな自分の都合のいいようにイメージしているので、同じ言葉を使っても通じません。そのようなときは一緒に地域を歩き、「これをこう守るのは保全だよね」とか、「ここに手を付けてしまうと自然は壊されるね」とか、「これに手を付けるのは再生活動だね」とか、そのようなことを共通認識していくことが大事ではないかと思います。

先ほど言葉の話がありました。「戦略」って何、と。私たちはつい行政の方に乗っかり「生物多様性地域戦略」や「保全戦略」などと言っていますが、私たちにとって生き物と一緒に生きていくことは「戦い」ではない、「戦略」ではない、行政に呑み込まれてはいけないと、日本自然保護協会の会員の方から怒られました。ですから、行政と話をする時は「戦略」という言葉を使っていけばいいと思いますが、私たちがこれから地域で実質的に生物多様性を守り、ともに生きていく道を作るのなら、「戦略」という言葉を使わなくてもいいのではないか。もっと自由な発想で、漫画や映像、絵本にしてもいいですし、行政が「生物多様性地域戦略」と呼んでいるようなものを、地域で自分たちでどんどん作ってしまう。いいものを作れば、行政はだいたい現場の後追いですから、いいものをモデルケースとして法律や仕組みに入れてくれますので、そういうもので当たっていけばいいのではないかと考えているところです。

第２部：グループディスカッション
「地域を知るコツ！を考えよう」

ファシリテーター：鹿谷麻夕（しかたに自然案内）

１テーブル５～６人ずつのグループに分かれてもらい、あらかじめ準備しておいた「地域を知るコツ」アンケートに記入していただき、 それを元に、それぞれのお気に入りの地域が、将来どういう姿になってほしいのか、意見交換する場にしました。

最後に各班から、まとめの報告をしていただきました。

アンケートの項目

①あなたの地域（島、市町村、字など、「自分の地域」だと自分が思う範囲で構いません）の中で、あなたの「お気に入りの場所」はどこですか？
②最近そこで、良くも悪くも何か「変わったな」と思うことはありますか？
③その「変化」はなぜ起こったのだと思いますか？また、どれくらい変わったと思いますか？
④なぜ、どのくらい……を正確に知るには、どのような記録を残しておけば良かったと思いますか？
⑤今後、その「お気に入りの場所」がどのようになってほしいと思いますか？
⑥そのためにはどのようにしたら良いと思いますか？

参加者の皆さんからのご回答

---

①スーパー丸大～居酒屋ばんしるー
②スーパーの表示が○○県産から「国内」に変更。さしみを４～５切で売るようになった。県産品が少なくなった。野菜も魚も高い。
③原発事故、孤老の増加、流通の自由化、大型化、中小商店の減少
④商品の継続的なモニタリング、生活保護、遺族年金受給者、独居老人の数などを民生委員、自治会ともに分析
⑤
⑥生産者とつながった消費、縁側の復活→多世代のかかわり、
子供と老人が言葉を交わし、目に見える形の「暮らし」の復興

---

①泡瀬海岸
②生物が少なくなった（種類も数量も）
③埋め立て工事
１０分の１以下に減っている（生物の数と種類が）
水質も悪化している（にごっている、水温が高い）
④見かけた生物の種類と数、場所、季節を記録しておけばよかった。
周りの様子も写真等で残しておけばよかった。
水質や水温を調べておけばよかった。
⑤昔のような子どもたちが安心して自然に触れて遊べるようになって欲しい
⑥工事をやめて、地域の人たちに海を返してほしい。
今ある物をどう活用するかを考える。

---

①泡瀬干潟
②底質の変化、海岸からの湧き水、生物の種類と量の減少、潮流の変化→全体的に荒れた感じ
③埋め立て事業
海草場は７割方（？）なくなった。
ハボウキをはじめ二枚貝類
種類によっては絶滅に近い
④生物のリスト、定点観察、底質状態や湧水との関連づけ
海水の物理、科学的データ、流れ、にごり、栄養塩、塩分など
底質の状態の把握（定点観察）
⑤もとの様に海の草原の広がる干潟になってほしい。
ヒトと野鳥が近い、貝獲りができる、漁（タコとり、投げ網、底地網など etc）
⑥埋め立て中止→構造物撤去
観察会、勉強会などファンや保全活動の支持者をふやす。
行政への申し入れ
※今後はできれば、行政と喧嘩しない形でのまちづくりプランの様な所から関わってゆければと思っている。

---

①鍾乳洞
②１．畜産排水、生活排水の流入の減少
２．平和学習等での人の侵入増加
３．洞穴を知っている人の減少
４．周囲の開発と洞穴の埋没。周辺の村の消失。
③１．排水の規制の強化
２．地域学習と教育の推進
３．高齢化で戦争を知る人の死亡、野良仕事の変化
４．再開発、重機の使用
④洞穴の分布マップ、観光客数推移、入洞したときに気付いたことをその度に記録する。
⑤そのまま残っていて欲しい
⑥地域（集落）で、そこを正しく知る。

(写真）グループディスカッションのようす

(写真）各班の発表のようす

行政の保全条令
データの採取とそれの公表

---

①１．石川「高原」の展望台
２．真栄田崎
３．昔の伊岐城跡への「けもの道」と高台の奇岩（らくだ岩：俗称）
②１．最近忙しくていってないのでわからない。
２．ダイビングで有名になりすぎて、立派な駐車場（有料）もできた。道路も整備された。人も多く来るようになった。
３．３５年程前の最近、宅地造成で「けもの道」ないし「里道」が削減して、通学や散策の「里道」がなくなった。
③２．観光スポットとして定着した場所となっている。
３．都市化による宅地不足、原野山村まで住宅化したので、「けもの道」や里道が消えた。
④２．写真
３．写真。物語が思い浮かべるようなマップをつくっておければよかった。
⑤３．昔の新聞などに写真が残っていたら、市の歴史博物館などに展示してほしい。地域の多くの皆さんがねうちを認めるようになると最高です。
⑥地域の人との話、聞き取りで写真が残っているか探す。周りの仲間での話題や、冠婚葬祭などの場所で話題の１つにする。物語の発見。町立公文書館で調べる。公図、写真、新聞など。

---

①嘉陽海岸、オーシッタイの窯、川
②砂浜に石、れきが多くなった。赤土。
町中、店、菊の灯り
源河川のにごり
③沖の砂採集、農地からの赤土流出、埋め立て場から
④定点写真、水の透視度
⑤砂浜の現状維持、公害が少なく
⑥護岸がなく、アダン林、廃水の地下浸透、浄化
電灯・ネオンにかさ

---

①前田のゆうどれ、当山あたりの墓所にある浦添大公園、首里のりゅうだん池、首里城の裏、佐々木酒造のあるところ、那覇の山形屋裏
②１．きれいに整理され、らくがきも減少しました。
２．山がきりくずされ、宅地、スーパーが増え、空き地がなくなり、雑草も少なくなりました。
３．車が増え､私も車を持ち､歩くことが少なくなりました。
③スーパーのチェーン店をふやしていく政策のためでしょうか。浦添の最後の山というか、小さな森がなくなりました。小さな川がなくなり、虫が減っていると思います。
④緑地、特に松野数を数えて残しておけば、緑地の減少がわかると思います。航空写真で明白でしょうが…
⑤せめてそのままにして、人工物を増やさないで欲しい。
湧水→海草→ジュゴン
⑥観光経済といっても、自然を体験とか見せる、感じさせる観光にしてほしい。そうすることが自然保護と観光で将来の子どもたちの教育にも役立つような方策をとることが良いと思います。

---

①百名ビーチ
②人が少し多いでしょうか。パラグライダーが飛ぶようになった。
③人に知られる様になったから、それほど大きく変わった様に思いませんが、海の中は変わったかも（サンゴ etc、魚の数）
④サンゴや魚のモニタリング調査→昔の生活、インタビュー、生活史 etc
⑤このままずっとかわらないで欲しい
⑥自然のままがいいという価値観、イノーがいろいろな物を与えてくれる。
生活史、これまでのライフスタイルの伝達、環境教育

---

①南風原町
②道が整備されてきている

③交通網を整備し、便利にするためかなり変わったと思う
④航空写真や土地の履歴等
⑤自然と共生しつつ、発展していって欲しい
⑥
---
①豊見城城址公園
②閉園にした。公園のそばのマングローブ林が広がった。
③赤字経営？
上流（のは川）での開発工事（しゅんせつも？）による土砂が流れてきたためか？
もともとマングローブが育成しやすい場所（栄養豊富）だったためか
周辺の交通量が増え、CO2 増加が育成をあとおししした？
④メモを取る、写真をとる、データベースを作ってデータを整備する。
⑤自然豊かな、緑ゆたかないこいの場所になってほしい
⑥学校（小中高）で自然保護の教育を行う。
教科書で習う内容は高学年になるにつれてより遠いもの、ことを習うことになり、住んでいる地域が「見劣り」するような印象をもってしまう。周りで開発が進んで、自分の地域が相対的に「遅れ」ていても、それが「悪い」わけではない。
---
①泡瀬干潟、沖縄市
②海上埋め立て工事で干潟、浅海域が変貌している
③埋立により潮流に変化が生まれた。砂州の減少、藻場の消滅
④地形、生物分布、藻場、汚濁
⑤埋立うぃ中止して、干潟と浅海域が本来の機能を回復して市民が大いに利用できれば良い。持続して楽しめる干潟、浅海域になって欲しい。
⑥干潟、浅海域の理解を深める。
自然と人間の関係を多面的に知る。
自然を壊さずに生きる人間生活をみんなでつくる。
人と人とのコンセンサスを深める。
地域を知る、子どもたちに学校教育の一環として住んでいる地域をもっと知る機会を作る。
---
①馬場と毛（十五夜には網ひきや旗ガーエーをする。公的催しもある。２昔前は子どもたちが遊び、夕涼みも昼涼みもしていた所。）
②場上が整備され、どろんこにならずいつでもきれいに使用できる。
涼みが出来たモクマオや松が全部切り倒されてなごみもなくなった。
毛は中腹で削られて公民館が作られ遊びが出来なくなった。
③やはり便利さを求めたから。
様変わりに近く現在しか知らない人には想像しがたいと思われる。
④写真をとっておくと同時に書述も記して見えない部分を説明する。
⑤それ以前を取り返すことは出来ないので、それに代わる活かし方をするしかない。
⑥写真、書述等で旧、新の違いを知った後、旧の良さをいくつか保全しつつ、新改造出来なかったのかと問うことが必要だと思う。事例の１つ１つを検証する。そして次の事に備える。
---
①近所の畑
②子供が遊びに来るようになった
③鶏を飼い始め、子供が興味を持ったから、その子の親やおばあちゃんも一緒に立ち止まるようになった。あいさつをし、鶏や畑の話をするようになった。
④定期的に写真や映像を残しておくと、変化がわかったと思う。
自分が知るよりももっと昔の話を聞くと、見てみたかったなぁと思う。
⑤今のように子供の声がいつも聞こえてくるような場所、鶏が自由に飼えるような環境が続いたら嬉しい。
⑥となり近所を思いやる気持ちがあれば続くかなと思う。
子供の声や鶏の鳴き声をほほえましいと思う人もいれば、うるさいと思う人もいる。でも、もし知り合いの子供だったら、自分の子や孫だったら、その子どもたちが鶏と遊んでいたら、どう思うだろうか。自分も含め、地域、大事にしたい場所に少しずつでも関わりを持つこと、今のような時代には少し意識して行動するといいと思う。
---
①家、部落全体
②アパートが増え、本州の人も増えた
③人口が増えたため
④広域、スポットの記録
⑤車両進入禁止
⑥自治体（住民）の賛同を得る
---
①１．瀬喜田～喜瀬―ブセナの海岸線、名護２１世紀の森ビーチ～宇茂差、名護湾、浦
２．宮里のウタキ
②１．人工ビーチが造られた。砂浜の拡大
２．木々の元気がなくなった
③１．開発、観光
２．台風、手入れをする人々が減った
④１．写真記録、海の使われ方等目視で確認して見ることができる魚の種類、量
２．木の数、どのように手入れされていたか掃除の回数、儀礼等の回数
⑤１．ひとまず、これ以上の海岸線の変化（人工ビーチ）を止めて欲しい。砂を入れなくなったらどうなるかを見てみたい。
２．木が元気になって欲しい
⑥
---

①今帰仁村古宇利島
②あります。観光開発、宿泊、食堂、施設増えた、静かな環境が西部劇の町のような騒然としたものになった。
③島への端ができるとともに変わったと思います。
④橋建築前の写真
⑤難しいとは思うが、秩序ある静かな島に少しでも戻って欲しい。今、島にはさらに大規模な観光開発（名護市パイン園）や高い展望台（３５ｍ）が予定されており、中止して欲しいものである。
⑥村民、島民が開発が本当に地域のためになるのか、未来図を想像し、話し合うことが必要。今まで村当局はその開発について村民、島民に広く意見を問うたことはないと思う。
---
①みどりの木陰
②１．地域への関わりの希薄化
２．都市化計画で市民の流れと無関心
③開発志向、自然では食えないという思いこみ
④市町村
学校から出ない、でれない教員をどうするか
⑤都市の自然の再生
⑥１．自然は都市にはなく、田舎にしかないのか？自然教育のいいかげんさ
２．国交省の「～事業」「～事業」など、環境再生事業との連携
３．子どもたちの小学区の自然（木、花、小動物）のマップづくり（親子教室）
４．自然調査ガイドの養成活動
---
①泡瀬干潟
②変わった形のヒトデなどがいなくなった。水の色が変わった。アジサシも数が減ったと思う。
③愚かな埋立工事ゆえ。「劇的」にではすまないほどに悪い方向へと変わった。
④写真、映像、テキスト、インタビュー音声／動画、かつていた生物の標本など。
⑤ただ一言、もとに戻って欲しい。
⑥埋立工事の即時中止といった工事水域の浄化活動（そんな活動ができるかさえ不明）。それでも元に戻ることはないと思われる（例外はテムズ川。ただし多額な費用がかかる）
---
①職場前の浜（海）
②にごってきた（とみんなが言っている）
③陸域の開発（農地も含めて）
④にごりのある日数
⑤にごりが少なくなるといい
⑥陸域の流入土砂の軽減
---
①地域：関東地方（湘南 or 埼玉）→江ノ島と三浦半島の海
②魚が釣れづらくなった？南方系の魚が増えた？
③気候変動？（水質汚染、乱獲？）
④魚種、出現率
⑤安全に食べられる魚がいつまでも一定量獲れる海
⑥海洋環境の継続的なモニタリング（漁協等の協力による漁獲データ、水温、水死宇ｔ、周辺の開発状況 etc）
上記を基とした行政・市民合同型の都市（ルール）作り、開発。特に一次産業への注力、自立経済圏作り、合意形成
---
①やんばるの沿岸、自然海岸
②自然海岸がほとんど残されていない。生物多様性の激減。
③１．県民が自然とふれあいがない→高齢化→海の利用が減ったこと
２．保安林の荒廃と防災機能、「環境配慮型」本学の結末
④過去の自欠と人とのかかわりあいの歴史。
生態系の調査・・・生物の機能
写真
⑤ジュゴンがすんでくれるような海
今残っている自然海の保全、生態系の保全
一度破壊した海岸の回復のために負荷を減らす。公共税への転換（プラスからマイナスへ）
地域の人がいける場所が少ない
⑥行政のたてわりから生態系にそった一連の政策への転換。
地元、行政、業者、ＮＧＯ、研究者のネットワークと～主義、行政にいかすこと、地元へのフィードバック
---
①首里城、小さな畑（おじいちゃん、おばあちゃん）
②首里城：町並みが赤瓦に・・・＋
畑：最近ではみたことがない。駐車場や宅地へ・・・－
③首里城:行政の取り組み。条令で→キレイ。町並みが揃ってきている。
畑：農業をする人がいない。車社会、効率を求めて→家の近くを歩いていて畑がない
④首里城：うつりかわりを写真でおさめる。
畑：畑をしている方と会話して交流。聞いたこと、見たことをレポートとしてまとめる。学校とかで継続的に環境教育のような形でもしていけば良いのかな。
⑤畑：小さな家庭菜園くらいの規模でも良いので広がっていけば地域にも緑も増え、子供達も自然、生き物に触れるチャンスが増えて、自然を好きになってもらう。→環境保全にもつながるんじゃないか！
⑥
---
①泡瀬干潟、ヤンバル、沖縄市、タキヤンバル、タチヤンバル
②自然破壊、埋立、森林伐採
③合意性のないリゾート計画、土建業界のための開発、基地おしつけの代償、自然環境が大きく変化（生物相、地形、潮干狩り）
④開発前のデータ、開発中のデータ、開発後のデータを科

学的、客観的に調査。写真、定量的、定性的なデータ
⑤再生事業に取り組む。エコツーリズムの観点で再生する場所、元の自然のままの場所等を考えて再生する。
⑥１．まずは現在の破壊をやめさせる。
２．環境省はもっと強く意見を出す。（環境省の役割の強化）
３．国家戦略、国際条約の実践、戦略アセスの実施
４．地域住民の合意形成、民主主義
---
①国場川、漫湖周辺
②モノレール整備、道路の拡幅が進み便利になったけど・・・
③ゴミの不法投棄（原因）
④清掃治効で進められるゴミの量、データ、写真、映像、いろいろあるけど味覚、におい、感動は伝わらないので、やはり体験するに尽きる。
⑤水鳥の数が安定すること。
地域の人が誇りを持って気軽に集える場所
⑥（那覇市、豊見城市だけでなく）周辺の自治体にも積極的に関わってもらう。関心のない層に関心をもってもらう工夫
---
①お気に入りというわけではないが、散歩圏にある真嘉比小周辺（おもろ町駅東側）
②急速に緑が消失
③開発、激変
④開発計画が事前にわかっておれば、散歩の際にカメラを持参し、変化を映像として記録できたのにと後悔。
⑤「お気に入り」ではないのですが、ノッペラボーの町（住宅街？）ではなく、少しでも個性のある街になって欲しい（歩きたくなる街、散歩して楽しい街）
⑥多分、開発計画は決まっていて、区画がディベロッパーから売り出されるだろうと思う。或いは、中には地主の方もおられるかも。こうした居住者達のつながりをどう作り上げていくのかがポイントか？私は当事者ではないのだけれど（土地の記憶の継承が大事と思う）
---
①百名のビーチ
②コンクリート、アスファルトの道が出来て、車が増えた。レンタカーが増えて、人が沢山来るようになった。
ゴミが増えた
③道が良くなった
インターネット、カーナビで多くの人が百名の海まで来れるようになった。
④車の数の変化、人の出入りはお金のカウントでかわかる？
ゴミの数
⑤静かな場所、落ち着ける場所
⑥利用のマナー作り、
使う側、守る側が新しい利用方法を提案
---
①歩いて５分もかからない所に港があるので、毎日犬の散歩がてらそこにいっています。
②歩道が整備されたので、漁港が狭くなった。でも、歩道が長くなったので、以前に比べると散歩コースになる頻度が高くなった。
③津波をくい止めるため、陸から遠いところで堤防を作ったと思う。釣り人も増えた気がするし、利用増を狙っていたのかも知れない。「海」というイメージから、「漁港」というイメージ（人工的）になった。
④写真で風景を抑えておくべきだった。
魚の住む量ビフォーアフターを調査すべきだった。
利用状況の観察調査
⑤地域の人が集まる場（老若男女）
⑥バリアフリー
地域への行事増
---
①１．キンザー沖合のサンゴ礁、浦添大公園
２．ようど水
②１．キンザーの海岸沿の海辺が泥で汚れがひどい。（アマモに大量の泥が付着）
　岩に泥が付着して滑って歩きづらい
２．首里城を連携プレイで観光力 up
　観光客が少なくなった。
③１．工事（今の時期）台風を考慮に入れた対応をしていない。担当役所のチェックが相当甘い。何故守らなくてはいけないのか（守るという意識）を理解
２．歴史に詳しい人でなければ魅力がない。表示物（案内）首里城とのつながりの表現が薄い。
④１．浦添市の職員は自分たちの海なのに関係ないとの事。県？国？の出先機関が担当とのことである。開発に当たって、シビアな現状社会の考えが反映されていないのでは？社会の共通の自然財産を守るという意識が薄い？
⑤１，２．県外以外の人たちが長滞してお金を落としていただける財産を生み、育てて欲しい（地域の元気がでる）
⑥１，２．自立（自主財源で県が食べていける状態）出来ることを念頭においた自然保全にして欲しい。
県民に対して理解の増大に向けて動いて欲しい。
県として、２１世紀ビジョンを県民に参加理解させる。
---
①糸満
②一旦、自然が壊滅的になった場所がゆっくり再生しようとしている。ダメだとあきらめていたが、久しぶりにいくと新しい発見がある。
③自然の力
④一番最初の姿がいつと定義すべきかであるが、地形、特に海の中の細かな現状
⑤ゆっくり回復していくのを見守りたい。
⑥回復しようとしている自然の力に、人間がこれ以上邪をしない。
---
①家から小学校へと続く小径
②道の側の家が新しくなった。

臭いが変わった気がする。つまらない道になった。
もっとのどかで時間がゆるやかだったように思う。
③自分が大人になり、興味を持って歩くことが減ったため生垣がなくなり、緑が減った（花やトカゲや虫を見かけることがなくなった）
④写真、日記（思いの部分が強いので）
⑤勝手に気に入っていただけなので、今後元の様になることはないと思う。ただ、「生け垣があった」ということの影響は大きいので、この場所でなくても子供が興味を持って歩けるような、緑や生け垣のある道、地域が増えればいいと思う。
⑥自分が家を建てるときに、生垣を作りたい。まず自分から。
地域で緑化の取り組みを行う。
既に活動している団体や地域のとりくみを把握して、ネットワーク化していく。

---

①壺屋のやちむん通り
②昔（８～９年前）は観光する人はあまり見られなかったが現在はイベントなどで人の出入りを見られるようになった。
③大幅な変化はないが少しずつ増えていいるのが実感できる。
④やちむん通りで働いている人に来客している人のデータをとる事だと思います。
⑤今よりもっと人が増えて伝統を知って欲しい。
⑥イベントなどだけでなくちらしや公告にのせてみるのもいいかもしれません。

---

①大浦湾、辺野古、天仁屋、大湿帯、東村、国頭村
②
③
④写真
⑤そのままであってほしい
大湿帯のジャングルエリア、森、川、海を守りたい
⑥危機感を持つべき（普天間、辺野古問題）
「保全」なのか、「開発」なのか、「再生活動」なのか、を意識（開発法子氏）
沖縄県民の意識を高めたい（辺野古／大浦湾がどこにあるのかさえわからない人がいる。）
貴重な場所として認められていることをもっと知って欲しい。（沖縄は「東洋のガラパゴス」以上！）
農家（土地を守っている人たち）の声を届けたい（例：台風被害があったときにも農家の人が不安にならないように対策を一緒に立てていきたい。みための悪いマンゴー等をアロマなどで流通させたい。品質は変わらないことを認知農業認知
参考）「トミーおばーの店」、長浜商店ブログ

---

①末吉公園です。ホタルやオタマジャクシ（カエル）、コウモリが見られます。
②観察会が増えました。ビオトープができました。ホタルや在来種について大事にする雰囲気がでてきました。
③「環境教育」ということが大事にされはじめ、新聞やテレビで取り上げられることが多くなったからでしょうか。どれくらい：少し種類が増えて目に見える生き物が増えました。（毎週観察会が開かれ、どのイベントにいくか迷います）
④専門的な調査は難しいのですが、わかる範囲で観察記録（フィールドノート）をつけておけば良かったと思います。特に植物（植生）であれば、記録に残しやすいのではないかと思います。
⑤できれば在来の生き物が多いところで「遊んで楽しい、見て楽しい」場所になって欲しいと思います。
子供が毎日遊びに来て楽しい場所になって欲しいと思います。
⑥少し生き物がわかる方が最初に説明してその場所が元々どうだったか、どうなっていくか、困っている事（課題点）等についてから、保全というか利用して地域密着型になってほしいと思います。定期的に利用している人たちが集まってざっくばらんに話し合う機会（場）があれば良いと思います。

安部：最後に、今日の会場を提供いただいております沖縄大学地域研究所の桜井国俊先生からご挨拶をいただき、このフォーラムを終わりにしたいと思います。よろしくお願いいたします。

閉会の挨拶

桜井国俊（沖縄大学／沖縄環境ネットワーク世話人）

皆さま、今日はご苦労様です。ご紹介いただきました沖縄大学の桜井です。

今日は、沖縄大学が「土曜教養講座」の一環として場所を提供しています。土曜教養講座を主催している沖縄大学地域研究所の所長の緒方が所要で留守にしていますので、代理をさせていただくことになりました。

今日のテーマである「地域を知るコツ」は、生物多様性地域戦略を作る上で市民の関わりが不可欠だということですね。生物多様性という言葉自体が難しいというお話もありましたが、私は、自分たちの地域に関わる、特に地域の自然と関わる市民がいなければ地域の自然、生物多様性は保全されないと思っています。

しかし、市民の視点から言えば、それに関わることが、自分が元気になる、地域が元気になるということでなければ動かないと思います。そのようなことを我々は模索していく必要があるのではないか。今回のフォーラムの後半のワークショップは、それに通じるものだったのではないかと思います。

私は伊豆の熱海の生まれで、18 歳の時まで、戦後何もない時期ですね、目の前の海、後ろの山、そこで遊んでいました。それが私にとっての原風景ですが、50 年経った今は、まったく私の原風景は残っておりません。子どもたちは、と言えば、自然とは関わりなく便利な生活をしています。そのような自然との関わりがない、地域との関わりがない暮らしが幸せだと思っている限りは、自然は守れないのではないか。それは、長い目で見れば、人々を幸せにしないのではないかと私は思っていますが、自然を守るためには、人々の地域との関わり、自然との関わりが必要だということと同時に、関わることが人々により幸せな暮らしになるのだという、この両者をイコールで結ぶような形にしない限り、なかなかうまくいかないのではないかと、常々感じているところです。

今日は代理で来ていますが、沖縄大学における私の役割は図書館長という役割ですので、図書館長として一言だけ申し上げたいと思います。沖縄という地域で、地域と関わる、すばらしい地域を作っていく、我々が幸せになるということで言いますと、地域に根ざした教育を若者が受けるということが大事ではないか、それを我々自身が考える必要があるのではないかと思い、大きな問題となっている社会科の教科書を直に手に取って、自分で考えてみようという企画を、今、沖縄大学の図書館でやっております。これは今月いっぱいやります。検定に通った 7 社の中学校の社会科の教科書、地理・歴史・公民についてすべて揃え、手に取り、見て、沖縄の子どもたちが学ぶ上でどの教科書が良いのか、我々大人が考えなくてはいけないのではないか。いろいろな議論がありますが、虚心坦懐に教科書そのものを見て、知ってほしいということで揃えました。

本学の図書館は夜 10 時までやっていますので、今日、夕食をとっていただいてからでも結構です、ぜひおいでいただきたいと思います。

本題からそれましたが、本日はたいへん長い時間、貴重なお話もあり、また、この場を通じて新たに知り合う機会もあったのではないかと思います。日本自然保護協会の皆さん、講演された皆さん、どうもありがとうございました。

アンケート

ご参加くださった皆さまに、当フォーラムに参加してのご感想をうかがいました。アンケートへのご協力、ありがとうございました。

・講師によっては聞き取りにくかった（事務局が要チェック）
・アンケートを早めにかかせたのは回収率 up につながると思う
・地域の自立を（旧来型の箱物策ではなく）考えている人が多くてうれしかった（単なる自然を守る犬ではない）
（浦添市・60 代男性）

「地域を知るコツ」として実際に専門的な人達の話を聞くことにより生物多様性の意味を知ることができたり、モニタリングの方法を聞くことができとても勉強となりました。私は大学生で多くの人達とグループになって地域の人達の話が聞ける場がとても楽しく、貴重な場だと感じます。要望としてはせっかくたくさんの人たちが集まっているのに時間の調達などでバランスが悪くなっているのを感じます。有効的に使えばもっとたくさんの人達の事を知ることが出来るので、難しい意見だと思うのですが、考えてくれれば幸いです。本日はありがとうございました
（那覇市・20 代男性）

多くの方が地域の変化に敏感に気づいているので、良い地域づくりにつながればと思います　（浦添市・40 代男性）

いろいろな立場の方と環境保全について意見交換できたことや情報収集できてよかった　（豊見城市・30 代男性）

・講演の中では開発さんの「市民調査」のお話しが身近で良かった。
・後半のワークショップは地域の環境に関心があり取り組んでいる人達と新たに知り合う良い機会であった
（那覇市・60 代男性）

始めて参加しましたが今後機会がありましたらまた、参加したいと思います　（沖縄市・60 代男性）

・なかのさんのお話がおもしろかった。
・地域づくりの話の基本はいつ聞いても、どこで聞いても、ほぼ同じ？それもすぐに出来ないだけ？
（浦添市・40 代男性）

多くの発表者から内容のあるお話をきけました。感謝します　（今帰仁村・60 代男性）

大変勉強になりました　（糸満市・50 代男性）

「意見交換の場」というのが大事だと思いました。ありがとうございました　（豊見城市・30 代男性）

楽しかったです。種をいただきました（沖縄市・30 代男性）

いろいろな意見が聞けて勉強になりました
（名護市・30 代男性）

いろいろな話を聞けてよかった　（南風原町・20 代男性）

・第 2 部のアンケートが設問が分かりにくかった。主題を「あなたの地域」におくよりも「具体的な地名で答えてください」のほうが曖昧でなく答えやすい。
・初めて参加したが非常に刺激を受けた。別の講座も受講してみたい　（20代女性）

・地域の人が関わることが大切だと感じた。沖縄の海を子供たち大切で身近に守って行きたいと感じるようになってほしい。
・グループで深い意見を聞く機会が設定されていてとても参考になった　（西厚町・50 代男性）

沖縄本島だけでなく、久米島や石垣島のような諸島も危機にさらされていることを初めて知り、非常に有意義なフォーラムでした　（沖縄市・40 代男性）

・対話　会話は緊張してしまう
・言葉の定義が違う
・6 人は多いかもしれない
・「沖縄」を意識すると「世界」の意識がはじまる（渡り鳥等）
（北谷町・30 代女性）

・そもそも自然を守るのにどんなメリットがあるのか？という人々にどう理解してもらうのか。地域の私の「お気に入りの場所」という切り口は良い入口になると思いました。
・「地域の人々」と「自然環境（自然からの恵み）」とが乖離しすぎているのが自然を守れなくなっている根本原因になっている様な気がします　（那覇市・40 代女性）

地域住民の方々がどの様に地元の自然に興味を持たれるか知りたく参加させていただきました。沖縄と一言でいっても広く、自然とのかかわりについても様々な関わり方を皆さんされているのだと思いました。なかなか答えが見つかりませんが多くの方々が色々な視点からご意見を述べられたので今後考えさせていただきたいと思います（30代女性）

・「生物多様性」という言葉を改めて少し深く理解することができたと思います。この言葉を本当に理解するには多くの方々の取り組みなどを聞くことが必要だと感じました。

・ワークショップでも班員の方々にも色々なお話や意見を聞くことができて大変勉強になりました。
・参加できて本当によかったです。ありがとうございました　（浦添市・30 代女性）

沖縄に来ると地元の自然を当たり前だと捉えて自然に興味の薄い人と出会うことが多く少し淋しい想いをしていました。しかし、今日は意識の高い人ばかりでとにかくうれしかったです。皆さんがいつまでも「アツい」大人として沖縄を引っ張っていって欲しいと思いました
（埼玉県・20 代男性）

・生物多様性とは関わり、ネットワークだという中野さんの言葉が分かりやすかったです。又、開発さんの様々な地域住民へのアプローチが参考になりました
・大切にしたい場所と、そこに住む人を関わらせる・意識させることはこれからどうしたいかを考える上で一番大事で核になることだなと思いました。自分のこと、法人の活動に役立てたいと思いました。　（沖縄市・30 代女性）

・地域での取り組みを事例を交えての講演で非常にわかりやすかった。保全活動やモニタリングは専門家しか行えないと思っていたので、市民が行っていることに非常に驚いた。また、市民を巻き込んでこういう取り組みをしているのは本当に良いことだと思うし、私自身参加してみたいと思った。
・地域資源と市民（住民）をつなげる取り組み事例を知ることができて本当に良かった。
・グループワークでいろいろな人と出会えて、色々な意見を聞けて本当に良かった。　（那覇市・20 代女性）

地域で取り組む際に大事なことは
　ビジョンをはっきり描くこと
　ビジョンをみんなで共有すること
　みんなが「自分のこと」として取り組めること
　自分と他との関わりを意識すること
　ネットワークを大事にすること
　ものごとの全体像（何が起きているのか、どんなつながりがあるのか、何が影響する (しそうなのか)）を把握し、予想すること
　否定しない対話が必要であること
……だなぁと思いました　（浦添市・30 代女性）

湿地帯・漫湖周辺の水鳥やマングローブ辺りでの小動物・植物は数多く生息しています。豊見城市は勿論ですが、糸満の兼城報得川から照屋部落辺りにカーブする渓谷の流域には野鳥が飛来してきます。周辺の調査も多様性から云うと要有りと考えます　（那覇市・60 代男性）

・たいへん楽しい時間でした。未知の方々と同じテーブルで思っていることを気軽に楽しく語り合う
・目標を共有するために・・・
・こういうスタイルを繰り返すこと→めざすことが実現できる日が確実に来てほしいと思いました
・心があつくなり、ゆめの広がるフォーラムでした。何よりもグループでの語り合いいいですね～
（那覇市・60 代女性）

・環境省，課（？），ＷＷＦの話は何度か聞いたことがありました.
・中野先生の話は興味が湧いた.
・生物多様性について・・・（←その後解読不可能）
（那覇市・50 代男性）

・第Ｉ部話題提供．時間が短く内容を把握するには難しい．沢山の報告は良いが，深まらなければもったいない．［４］の市民調査で自分たちの地域づくりの報告はわかりやすく大変良かった
・第Ⅱ部もグループ別でそれぞれ中身の深い話でなかなか良かった．それぞれの話題をまとめて今後に役立ててもらいたい　（沖縄市・60 代男性）

・沖縄県のサンゴ調査　全県の全地域の調査になっているのか調査対象をどのように選んだか。たとえば､「泡瀬干潟」などは調査したのか。
・今行われている開発にどう対処するのか
・話の内容が多岐にわたり抽象的である。もう少し具体的に。
・テーマが多すぎないか（２時間で４つ）。一人一時間でもっと具体的に　（沖縄市・60 代男性）

・行政、ＮＧＯ、研究者、市民活動の立場によって活動への取組、目的などさまざまであったのが興味深かった。
・最後のグループディスカッションでは地域のくくりが今いる場所、子供時代の場所、今活動している場所と様々で、それに伴い内容も思いも多様であるのが興味深く勉強になった　（宜野湾市・30 代男性）

・今回のワークショップでやったようなことを実際の行政政策につなげられるようにしなければならないと思います。緊急に対応を要する問題と、じっくり腰をすえて取り組んでいける問題とを区別して考えることが必要だと思いました。もちろん、両方を考えていくことで様々なヒントが見えてくるのかと思いました。
・普段話す機会のない人々と知り合えたこと、普段から知っていても辺野古や泡瀬、高江のことを中心に話している人とその人の生まれた地域や生活している環境について話せたことはとても良かったと思いました。（名護市・40代男性）

・どの方のお話も大変勉強になりましたが、もっと聞いていたかったのが中野義勝先生。いつかじっくり聴ける機会をつくって頂けたらと願っています。
・グループディスカッションもとてもよかったです。他の

人の生の声が聴けるって本当に得難く、本来常にあっていいことなのに。やはり、このような機会がないといつまでも点の弱いままの思いになっているのでしょうね。参加出来て本当に良かったです。
・こうして多くの人が同じ思いをもっているのだと感じることが出来心強くなれる企画でした。ありがとうございました　（那覇市・60 代女性）

・中野義勝さんの話が魅ま込まれた。かみくだいて話してくれるし、話し方も他の人の話を織り交ぜたりしていて楽しかった。行政、地域、学者などいろいろな人がそれぞれの立場で意見やデータの報告があったりして、聞いていて面白かった。専門的な話になると頭に入ってこなかったけど、図などを多用してくれて助かりました。
・私は「今」の地域しか知らなくて色々地域の環境に思いをはせたが、地域の歴史まで知った上で、今日のアンケートにまた答えてみたいと思った。
・定期的にこのような場があったらいい（南城市・20代女性）

・里山とのかかわりを聞きたくて来ましたけど、他の人の話も勉強になりました。天願河、比謝川などを上流から下流まで自然観察＊＊、地域の人々が足を運んで関わることからその周囲の里山へ地域の人々の目が行くようになって戦前の人々の暮らしと地域との関わりを掘り起こし、地域共同体の再生へつながると楽しいと考えます。今は土地は相続しても自分の土地にほとんど足を運ばない人が大半で外からの働きかけがあると対処も十分出来なくて不利益を生いるてとも起るかもしらないです。里道も生きてくるとおもいます。（一部解読不能）　（旧石川市・60 代男性）

沖縄大学土曜教養講座（第 483 回）／ NACS-J 生物多様性の道プロジェクト
報告書

フォーラム「地域を知るコツ！」
～生物多様性地域戦略につながる第一歩～

主催：日本自然保護協会（NACS-J）
共催：WWF ジャパン、沖縄大学地域研究所、沖縄・生物多様性市民ネットワーク
後援：沖縄環境ネットワーク、環境省那覇自然環境事務所、沖縄県サンゴ礁保全推進協議会
supported by Give2Asia

表紙のイラストは、しかたに自然案内からお借りしました。
http://www.ohana.sakura.ne.jp/zenkoku/zenkoutext/47okinawa.htm
http://www.wanpug.com/illust138.html